

---

# レイモンドール綺譚外伝（創成の章）

青蛙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レイモンドール綺譚外伝（創成の章）

### 【Nコード】

N9920C

### 【作者名】

青蛙

### 【あらすじ】

気候が厳しく、小さな領主国が互いに争って疲弊した島の小国の王、ヴァイロンが会ったのは一人の魔道師だった。「この島を統一した創成の王帝になりたくないか？」魔道師と契約した事から始まる物語。

## はじまりのはじまり（前書き）

この話はレイモンドール綺譚の五百年前の話です。レイモンドール国の王、ヴァイロンがイーヴァルアイと出会った頃から始まりま  
す。よろしく願います。

## はじまりのはじまり

「陛下、二刻も致しますればこの出城も落ちましょう。何とぞ御聖断あそばされて城からただちに落ち延びられませ。ハンゲル山で魔道師が待つております」

近衛府参事も兼ねる宰相イベントが、片膝をついている二人の兵士を呼ぶ。

「アルベルト、ルーファス」

「ははっ」

「精鋭の兵、三十名を連れて直ちに陛下をお守りしながらハンゲル山を目指すのじゃ。すぐ、出発せよ」

「イベント……」

「陛下、ここはお任せを」

イベントに力なく頷くと、疲労の色の濃い王ヴァイロンは兵士二人に抱えられるように歩き出す。こうして父親から王位を継いで三年ほどで、ヴァイロンは城から落ちていくことになった。

五十年ばかり前、広大な国土を統一した大陸最西端の国。ルクサン皇国をヴァイロンが王位を継いだのと同時期に皇帝の地位に就いた男がいた。皇帝ドリゲルト。ドリゲルトは父王より好戦的な男である。彼自らが大きな三本マストを立てた巨大な戦艦を四十隻も連ねて海峡を挟んだ島へ上陸したのは、九十日前のことだった。島国の中で争いを繰り返していた小さな国とは名ばかりの国々を斃しながら、ドリゲルト率いる軍は三日前、モンド国国王ヴァイロンの地へ現れた。

砂で作った城のように容易く軍隊は崩され、ヴァイロンは後退を余儀なくされて山脈との境にある出城が最後の砦だった。

地下に延びる隠し通路を、兵士たちに手を引かれる様に歩くヴァイロンをイベントは平伏して見送る。

「さて、私も動きますか」

年寄りにしては俊敏な動きでイベントは立ち上がり、印を組んだ。その口から漏れ出す言葉は古の言葉だった。厚い衣を脱ぐように老人の体を払うと若いローブ姿が現れる。

「やつと主の元に帰れますね」

男はにつこりと顔をほころばせた。

ハンゲル山はモンド国の半分を占めるゴート山脈の最奥にある霊山で、昔からその一帯に立ち入ることは禁忌とされている。

「そんな所を目指せとイベントは言うのか」

しかしヴァイロンにそれ以外の選択があるわけでもないのだが。城から落ち延びた翌日、昨日まで居た出城から黒煙が上がっているのを見て体を震わせながらヴァイロンは自分に誓う。

「何としても生き延びてやる。そして再興する」

速やかに行動を起こしたせいか、一行は一人も欠けることもなくゴート山脈に分け入った。

ところが山道をハンゲル山に向けて進めば進むほどに行程は険しいものになっていく。

岩が突然落ちてきて三人が潰された。泉を見つけた兵がその水を飲んで五人倒れ、夜の内に何人かが狼に闇の中に引きずりこまれてしまった。

朝になり歩みを始めた途端、崖から二人が足場が急に崩れたことにより落ちていく。あれやこれや災難が降りかかりハンゲル山を目の前にした時にはアルベルトとルーファスという近衛兵しかヴァイロンの側には残っていなかった。

絡み付く棘のある低木の茂みが続いて、そこを歩くヴァイロンの頭上には気味の悪いグロテスクな実をぎっしりと付けた巨木が林立

して薄暗い。とても今が昼間だとは思えないほどだ。足元にはびっしりと苔が生えていて、うっかりすると足をとられて歩きにくいことこのうえない。

そんな獣道のようなところをひたすら歩き。夜は狼と毒蛇に氣を取られなかなか休息もままならない。最後に取った食事はいつだったかも定かではなくなつて、後一ザン歩いて何も見えなかったら今日はもう動けそうにない。ヴァイロンは前を歩くルーファスの丸まつた背中を見て唇を噛む。

「あれを、陛下。何か建物が見えます。今日はあそこで休みましよう」

後ろを歩いていたはずのアルベルトが先にそれを見つけて掠れた声を張り上げる。木々に視界を遮られている枝葉の間から、異国風の廟が切り立つた巨岩に直接彫りこまれて造られているのが見てとれた。中々近づかないと思つていたのは、それがこの廟があまりに大きいために直ぐ側にあると錯覚したためだったらしい。三人が廟を見つけて半刻も歩いてやっとその廟の前に立つことが出来た。

その廟の前に灰青色のローブを着た男が佇んでいる。

「お待ち申し上げておりました」

男はそう言つて頭を下げたまま石造りの扉を苦もなく押し開いた。「待つていたと？」

「はい」

男に続いて中に入ろうとしたヴァイロンの前にルーファスが回りこんで制する。

「わたしが先に中を見てまいります」

その肩をたたいてヴァイロンは静かにルーファスを見る。

「どうやらここに魔道師がいるのだらう。わたし達はここを目指していたのではないのか、ルーファス。ならば、この中にいるのが魔道師だらうが妖の類だらうが行くしかない」

ヴァイロンの言葉に返すことも出来ずにルーファスとアルベルト

も後に続く。

「妖の類とは失礼ですね」

ぽつりと言ったローブの男は体を返して建物の中に入っていく。縦に長く切られた窓から細い光が大理石の床を照らして、黒曜石で描かれたまじないの文様が浮かび上がって見える。ヴァイロンはその奥にある螺旋状らせんの階段を男に続いてやっと登っていく。体中の筋肉が悲鳴をあげていた。だが気力だけで男を見失わないように、ただ追いて行くことだけを考えて足を動かしていた。気がつくとも男は立ち止まっていた。

「こちらに」

男が指し示した中に入るとその部屋は他より一層暗く、足を踏み入れたヴァイロンは暫く目を慣らすのに時間を要した。

「おんな……」

ヴァイロンの目に飛び込んできたのは、亜麻色の長い髪を垂らし眠っているように目を閉じている若い女の姿。しかし着ている物は案内して来た男と同じような黒いローブ姿だ。寝ている寝台の前には薄い紫色の結晶が柵のように部屋を寸断している。

魔道師とイベントは言っていたが、違うのだろうか。もっ

と良く見ようと近づくヴァイロンに従者たちは慌てて止める。

「むやみに近づいては危のうございます、陛下」

「その鍵を手取るのだ、ヴァイロン」

女にしては低い中性的な声にはっとしてヴァイロンが寝台を見ると、そこにいた人物は起き上がって色素の薄い水色の瞳でこちらを見ていた。圧倒的な美しさにヴァイロンは暫く言葉もなく見つめていたが。

「わたしの名を知っているのか」

「モンド国国王、ヴァイロン・クロード・ヴァン・レイモンドール。そんなことは知っているさ」

ふっと笑ってその女は目を細めた。

「おまえは何者だ、女」

「わたしは魔道を操る者、名前は……そうだな、イーヴァルアイだ。そしておまえは一つ間違いをすでおかしている。わたしは女ではない。男だよ、生憎」

「陛下、どうぞ近づかないで下さい。イーヴァルアイとは邪視をあらわす言葉でございます。この者はきつと妖でございましょう」

アルベルトが尚も近づこうとしたヴァイロンに向かって大声をあげると剣を抜いてイーヴァルアイをねめつけた。

「ふーん、おまえの従者は学があるね。だが賢さを見せびらかすと早死にすることもある」

イーヴァルアイの手が素早く印を組み、レーン文字で呪が唱えられる。

「お前のことだよ」

「うわあっ」

イーヴァルアイの言葉が終わるやいなやアルベルトは、その場に崩れるように倒れた。彼の腹には柵のうちの一本が刺さっていた。抜かれた後には早くも新しい結晶で出来た杭が柵を形成していた。



## 「鍵」との契約

「アルベルト」

駆け寄ろうとしたヴァイロンは柵の間から伸ばされたイーヴァルアイの腕に捕らえられて後ろから羽交い絞めにされる。

「おまえの従者は死にやしないよ。それよりヴァイロン、まずは取引だ」

「取引？」

驚いて後ろを見ようと顔を向けるヴァイロンにイーヴァルアイは唇をにやりと引き上げてみせた。

「陛下、ここを出ましよう」

ルーフアスが叫んだ。

「うるさいな、おまえの従者はどいつもこいつも。黙らしてやる」  
印を結ぼうとヴァイロンから手を離れたイーヴァルアイの腕をヴァイロンが逆に掴む。

「止めろっ、わたしの従者にこれ以上手を出すんじゃない」

「ちっ、面倒くさい。だったらおまえが黙らせろ、ヴァイロン」

苦々しくヴァイロンを見ながらイーヴァルアイは反対の手で自分の手を掴んでいるヴァイロンの手を払った。

「カルラ様、短気をおこされませんように」

「うるさいっ、ラドビアス、サイロスを呼べ」

ここへ案内して来た背の高い男がはあと溜息をついて部屋を出て行った。

「ルーフアス、ここを出てお前と怪我をおったアルベルトと三人で何ができるというのか。わたしはこの者の取引の内容を聞きたい。

おまえも堪えてくれ、頼む」

「……仰せのままに、陛下」

一兵士にすぎない自分に王が頭を下げるなど。もったいなく思う気持ちと他に何も残されていないのだ。そんな追い詰められた

ヴァイロンの気持ちを思つて、ルーファスはがくりと膝を折った。

「さあ、もうこちらに話を戻してもいいのだろうね？　いつまでも主従のお涙頂だい話に付き合う気はわたしには無いからな。おまえ、神が何かに助けを請うつつもりでここに来たのなら見等違いもいいところだ。お察しの通り、わたしはどちらかというと妖よりだ。垂れ流しの慈悲なんてものには何の興味も無い」

イーヴァルアイはふんと鼻をならして腕を組んでヴァイロンをじろりと見る。

「では、先にわたしの要求をきいてもらうがいいか？」

「どうぞ、王さま」

ヴァイロンは、ばかにしたようなイーヴァルアイの言葉に憚然としながら指を折る。

「一つはわたしの国からルクサン皇国の軍を一掃すること。二つ目はこの先わたしの国が他国から侵略されない手立てをすること。おまえの力がいかほどのかわからないが、それができるのか、イーヴァルアイ」

「できるか、だと？　聞き捨てならないな、できるに決まっているだろう」

むっとした顔を隠そうともせず、イーヴァルアイは地団駄をふんだ。

力のある魔道師だと思っていたがどうなのだろう。　こんな子どもっぽい仕草を見せるこの魔道師は見た限りではわたしよりも歳が下のようだ。　ヴァイロンは心配げにイーヴァルアイの顔を見る。

ぷうと膨らませていた顔を元に戻すと、イーヴァルアイは考えるように顎に手をあてた。

「さて、どうしたものか。陸続きの国境に結界を張るのは少々やかいなんだ。短時間でやるとどうしても穴が出来易いし」

困ったと言いながらイーヴァルアイはにやりと笑ってヴァイロンを見た。

「こうしちゃあどっかな？ この島ごと海岸線に沿って結界を張ってしまうつてのは。そうすれば小さい争いも無くなる。なにせ、お隣もお向かいもおまえの国なのだから」

「何を言つて……」

「この島国を初めて統一した王になれと言っているのさ。ヴァイロン・クロード・ヴァン・レイモンドール、レイモンドール国の創成の王帝におなり。国土を統一して争いのない国を作りたくないか？ 国民は潤い、国土は大いに栄えるだろうよ」

畳み掛けるようにイーヴァルアイの甘言が続いてヴァイロンは飲み込まれるように立ち尽くした。

このわたしがこの島を統一する王に？ そんな事がもしできたとしてその代償とは一体なんだ？

「それで、おまえの条件とは何だ」

「そうこなくては。おまえは話のわかる奴だな。まあ、ここで断つたところでこの島国の主がドリゲルトになるだけだからな」

右の眉をあげてイーヴァルアイは楽しそうに笑った。

「おまえが国主になったらこの国を魔道を奉じる国にする。まあ、これはおまえの益にもなることだからな。国境を魔術で封じるのだから魔道師の数は多く要る。そして……」

「そして、何だ」

「おまえたちレイモンドール国の王が裏切らないために国王に繋がる者を国王が即位するたびに一人、わたしに渡してもらおう。おまえが子どもを二人儲けたらそのうちの一人をもらいうける」

「二人？」

「そうだ、生まれてくる子どもは双子のはずだ。何年先か、何人かの後かそれはわからないが。そのためにおまえは不老となる。わたしと取引をすればね」

暫くヴァイロンは逡巡するように押し黙った。

魔道と手を結ぶことによって国を強固にできるなら、それはそれでこちらこそ魔道を利用してやろう。それでこの何年も続い

た戦乱の時代を終わらすことができるというのなら自分の子ども一人くらいくれてやる。

「いいだろう」

ヴァイロンにとって子どもの一人を渡すということにためらいは無かった。この戦乱の時代、子どもは王にとって大事な駒だ。

ヴァイロンの姉や弟たちも皆、他の国へ嫁入りしたり婿に行ったりして他の国と誼を結ぶ助けになっている。庶子は臣下の家と婚姻させて国王に逆心の意を向けないようにする。そういう時代だった。

そして、王になったばかりで后妃との間にまだ子どももないヴァイロンには、子どもへの愛情など今だわかっていなかった。

「その、壁ぎわの机の上に箱がある。サイロス、鍵をヴァイロンに渡せ」

サイロスと呼ばれたさきほど出て行った男と入れ違いに入ってきたローブ姿の男が机の上の箱を開けて中から美しい細工を施した鍵を取り上げてヴァイロンに差し出す。

鍵を受け取ってヴァイロンはじっくりとその鍵を眺めた。燦し銀の本体に銀の竜が巻き付くように彫られている。その竜の右目には紅玉、左目には青玉がはめ込まれていた。鱗の一枚、一枚がクリスタルでできているように室内の暗い中でも僅かな光に反射して輝いている。

「持ったか？」

イーヴァルアイの問いに頷きだけ返す。

「それを持ったままわたしの言う通りに唱えるのだ、ヴァイロン」  
「わかった」

「我、汝と契約するものなり、血の契約を約するものなり。変じよ」  
イーヴァルアイが目でそくす。

「我、汝と契約するものなり、血の契約を約するものなり。変じよ」  
ヴァイロンは手の平にのせていた鍵があまりに熱くなり、危うく落としそうになった。

「大事に扱え」

ヴァイロンが呪文を唱えるのを、息もせずに見つめていたイーヴァルアイが息を長く吐いて文句を言う。

イーヴァルアイの文句を受けて、持ち直そうとした鍵は陽炎のように周りの空気を振るえさせながら切り裂くような、まるで獣の咆哮のような音をたてる。と、同時にその姿を変えていく。啞然とするヴァイロンの手の中にあるのはすでに鍵ではなかった。美しい竜が柄から鏢にかけて巻き付いている細工があり、剥き身の刀身には細かく何か古い言葉で呪文が彫り込まれている長剣。

「それでこの忌々しい柵を斬ってくれ、ヴァイロン」

イーヴァルアイに応じてヴァイロンは剣を握り直すと気合とともに横に柵をなぎ払うように剣を振るう。硬い手ごたえを覚悟していたヴァイロンは、あまりの手ごたえのなさに剣を思い切り壁に打ち付けて火花を飛び散らせた。痺れる手を庇いながら頭を上げる<sup>かば</sup>と手ごたえを感じていなかったはずの紫の結晶で出来た柵は霧のように散じていた。

「『鍵』は今からおまえの意によって形を変えるだろう。おまえは『鍵』と契約を交わしたからな」

「『鍵』との契約？」

「そう、わたしとの取引とは『鍵』との契約を意味する」

「何か不都合なことを隠していないだろうな？」

ヴァイロンは疑わしそうな顔をイーヴァルアイに向けた。

イーヴァルアイはヴァイロンに向けてにやにやと笑いながら近づく。

「『鍵』は便利なものだよ、いつもは指輪にして右手にはめている事だ。これはわたしと取引したお祝いの品だと思ってくれていい」  
そう言うについつとヴァイロンからイーヴァルアイは離れて立つ。  
「自由になったからにはやるのが山ほどある。まずはここから竜門を開く」

ぶつぶつと呟くように言いながらイーヴァルアイは印を組む。

『閻王の書、閲覧、開示せよ』

その後が続く古代レーン文字。ヴァイロンの頭の中にその一文がつかの間浮かんで消えた。

「三人か。門を開くにはぎりぎりだが仕方ない」

イーヴァルアイが言いながら印を組み替える。

『アルベルト、ルーファス、サイロス、魂を持って竜門を開き門の番人とせしめよ』

「ぐわああ」

「へいかああ」

二人の従者の悲鳴と共にいきなり壁の一部が黒い渦になり、アルベルトとルーファスを引き込んで行く。あつという間の出来事にヴァイロンは手も出せずにその様子を見ていた。

その黒い闇は生き物のようにはぐりと二人を飲み込むと、中から黒い触手を伸ばして部屋の前側に控えていたローブ姿の男を掴む。その驚いた顔が消えぬ間にひゅるとひゅとぱりこんで飲み込んだように見えた。そして訪れた静寂。あつという間にここまで苦楽をともにした従者をヴァイロンは失くしたと知る。

「おまえよくもわたしの大事な従者を」

ヴァイロンはイーヴァルアイの胸倉を掴むとそのまま引き倒し、馬乗りになると手にした長剣をその胸に突きつけた。

「おまえ、ほんとに甘ちゃんだな。ここに何しに来たんだ。幸せになりますようにってお祈りにでも来たのか、ヴァイロン？」

ほとんど抵抗もせず床に引き倒されたイーヴァルアイが呆れたように冷たい目をヴァイロンに向けた。

## 戦士の休息

「今の状況をひっくり返すといっているんだ。この島の覇権をおまえが握るということがどういうことかわかっているのか。きれいな事ですむわけが無いだろう。今お前の側にいるのはわたしだけなんだぞ。この二人だけで何とかしようという今、おまえだけが清廉でいられるわけが無い」

「わ、わたしは……」

イーヴァルアイの二人だけという言葉にヴァイロンはぐくりと唾を飲み込んで立ち上がった。

小さいながらも一国の皇太子として生まれ、父親の後を継いで王になった自分。しかしこれからやろうとしていることは、他人の国を蹂躪し奪い、殺す。つまりはそういうことだ。

「すまない」

手を引いてイーヴァルアイを助け起こしてやると、掴まれている方の手がヴァイロンの肩に置かれる。

「今だけだ、ヴァイロン。国を手に入れたらその後は輝く玉座で国民の幸せを願う賢王として暮らせる。他のことはわたしとわたしの眷属がいろいろにするから。おまえの従者もわたしのも死んでしまったわけじゃない。まあ、魂を竜門に縛られているけどね」

イーヴァルアイはちらりと闇に目を向けた。

「そこはどこへ通じているんだ？」

「どこへでも」

そう言っただけイーヴァルアイは片側だけ唇を引き上げた。

「では早速ドリゲルトの軍に向かうのか」

勢い込むヴァイロンを押しとどめるようにイーヴァルアイが置いたままの肩を軽くたたく。

「あれはちよつと放っておこう。それより海岸線に結界を張るほうを優先させる」

「どういうことだ？」

威勢を削がれて慄然としてヴァイロンはイーヴァルアイを見ると彼はまたもやにやりと笑う。

「他の小国と戦う気が、ヴァイロン。我らは二人でしかもやることは両手に余るほどある。ここはドリゲルトにもう一頑張りさせる。その間にドリゲルトを島に封じる手筈を整える。それまではおまえの手下としてドリゲルトにこの島中の国を滅ぼしてもらおうじゃないか」

あつさりとなんな凶悪なことを口にしてイーヴァルアイは笑い顔をヴァイロンに見せるのだ。

やはりこいつは妖かもしれない。しかし女じゃないと言われたときに腹が冷えたような気がしたのはどういうことだ。それこれもこれもこいつが男のくせに今まで見た女性なんかよりはるかに美しいのが悪いのだ。

そこではつと自分がイーヴァルアイの腕を掴んだままなのに気付いてヴァイロンは焦ってやや乱暴に手を離れた。

「まずはおまえには休息が必要だ。確かこつちに……」

ヴァイロンのそんな気持ちに頓着とんちやくすることなく、イーヴァルアイはせっかくヴァイロンが離れた手を掴んで引つ張るように部屋を出る。次に右に折れて柱の陰になっている小さい部屋の扉を押し開く。

その部屋は狭いながら寝台と机が置いてあつたが長いこと使われていなかったのか冷たくやや埃っぽい。

「休むなんて後だ」

「だめだ、おまえは大事な体なんだから」

とんと胸を押されて寝台に倒されて抗議したヴァイロンだが呪をかけられたのか、あつという間に深い眠りに落ちていった。深い息遣いに胸が上下しているのを満足そうに見て、イーヴァルアイは緊張を解き放つて大きく息をした。余裕があるふりをなんとかやりとげて心からの笑顔を浮かべる。



「うまくいきそうだよ、ラドビアス。いるのだろうか?」

「はい、カルラ様」

「これからはイーヴァルアイだ、良い名だろう?」

イーヴァルアイの話す言葉はさつきまでの大陸の西側とこの島で一般的に使われているものではない。大陸の東の大国、ハオタイのものだった。イーヴァルアイの背後からラドビアスと呼ばれた背の高いローブ姿の男がそれに同じ言葉で応える。

「しかしヴァイロンがあんまりじつと見るから、わたしの真意に気づいたのかもって肝が冷えたよ」

それはあなたに見とれていただけです。

胸の内だけでラドビアスは返事を返す。自分の主人の見かけの美しさに自覚がないのにも困ったものだ。ラドビアスは溜息をつく。他人が自分に注目するのは女に見えるからということばかりにむきになっているが、自分の美醜ひしゅうに関することにはまるで頓着しない。そのお陰でこの島にたどり着くまでどんなにわたしが苦労したと思っているか。いや、言ったとしてもおまえが勝手に騒いでるだけだ。とにべもないだろうが。

「あのままヴァイロンに殺されるかと思ったよ」

緊張がとけたのか、からからと声を出して笑うイーヴァルアイにラドビアスはむっとりと言う。

「先に説明しないからですよ。わたしなんか声が出ないくらい驚いて、あやうくヴァイロン様を殺すところでした。あの剣が少しでもあなたに触れていたらと思うとぞつとします」

「大げさだな、ラドビアス」

「何を仰います、わざと説明を後回しにしたのはわかっていますからね」

冷たくラドビアスに言われてイーヴァルアイはちえつと小さく言った。

「うるさいやつだな、何にせようまくヴァイロンに契約させたのだからいいじゃないか。久しぶりに会ったというのにまったく、口の

減らないやつだ。ヴァイロンが落とした剣を拾って机の上に置いてくれ。わたしは触れられないからな」

イーヴァルアイは辟易へきえきしたように横を向く。

ラドビアスが剣を机に置いてイーヴァルアイを見ると彼は、ヴァイロンの寝顔に見入っていた。

「きれいな髪だな、銀をとかしたような金色だ。瞳の色は深い水の底のような色だったな。この島国を統すべる王にぴったりだとは思わないか。ヴァイロンはわたしを……恨むかな、それとも憎む？ 真実を知ったら。ねえ、ラドビアス」

「どうでしょうか」

「おまえはいつもそうやって答えをはぐらかすんだな。まあ、いい。結界を張りに行つて来る。今は贅には不自由しないからな。おまえはここでヴァイロンを見てくれ、何かあつたら困る」

イーヴァルアイは広間に戻ると竜門に手をかけてラドビアスに一瞥いちべつだけくれるとずるりとその姿は闇に消えた。

## 嫉妬するほどの孤独

「本当にお会いしたかったんですからね」

ラドビアスが低く呟いた。モンド国の宰相に擬態<sup>ぎたい</sup>し、ルクサン皇国のドリゲルトの側近に近づき戦意を煽<sup>あお</sup>った。

この一年ほどいろいろと裏で動いていたのだ。この度のヴァイロンを襲った悲劇も偶然では無い。しかしこれからや々と始まったところだ。

まったく夢を見る事もなくヴァイロンは眠り続けていた。果たしてそれが自然なのか、術にかかっていたのか定かでは無かったがそれでも体力の回復には役立ったのは確かだった。

「……ん」

寝返りを打って手が壁に当たり、その衝撃で目が覚めたヴァイロンは慌てて起き上がる。

「ここはどこだ？」

湿った毛布を払いのけて狭い部屋の中でしばらく頭をめぐらして、思い出す。

ここはハンゲル山の廟だ。

「目を覚まされたのですか」

その声に驚いて振り向くと灰青色のローブを着た男が寝台の端近くに立っていた。

「イーヴァルアイは？」

勢い込んで問うヴァイロンに水を入れた杯を渡しながら男は言う。「喉がかわいておられませんか。十日間も寝ていらっしゃったのですよ」

「十日間？」

「はい、わたしはイーヴァルアイ様の僕<sup>しもへ</sup>でラドビアスと申します。何なりとお申し付けください。主はもつじきお帰りになりますよ」

ラドビアスが持ってきた水を飲んでいかに自分の体が水を欲していたかがわかった。三杯目の杯を飲み干しながらヴァイロンはそれでも腹の虫が治まらない。

わたしと二人だけだといいながらあと何人従者がいるのかわかったものではない。イーヴァルアイの事を簡単に信じるものかとヴァイロンは苦い顔で闇の中へ行ってしまった魔道師を思った。その後、ラドビアスの持ってきた粥をヴァイロンは口にして初めて自分は腹がすいていたのを意識する。

「少しずつ形のあるものにしていきますので」  
器をヴァイロンから受け取るとそう言い残してラドビアスは部屋を出て行く。それを見送って自分はそんなに弱っていたのかとヴァイロンは息を吐いた。

そつと寝台から足を降ろしてみる。床を踏む足に少しずつ力を入れて立ち上がりかけたヴァイロンに、いつ戻ったかラドビアスが声をかける。

「『鍵』をお持ちください、ヴァイロン様。変じよとお命じください」

渡された剣に命を下すと剣はヴァイロンの手の中で指輪になって収まった。

「いつも御身から離さずお持ちくださいませ」

それはあつらえたかのようにヴァイロンの右手の中指にぴたりとはまる。いつの間にかヴァイロンは夜着に着替えていたようだ。

すぐに清潔に洗われた服を持ってラドビアスが現れてあつと言う間に着替えさせられた。

ラドビアスの差し出した肩に体重を預けながら、広間に行くと竜門に内側から手が掛かったところだった。白く長い指、そしてその持ち主が姿を現す。

「終わりましたか」

ラドビアスが問う。

「大陸側はあらかたな」

疲れた声で答えるとラドビアスの横のヴァイロンに声をかける。

「起きたのか、ヴァイロン」

「おまえはわたしと二人とか言いながら、何人従者を持っているんだ？」

「ああ、そのこと」

イーヴァルアイは困った顔を見せる。

「弁明したいけど今はうまく頭がまわらないな、ヴァイロン」

その場に座り込むイーヴァルアイにヴァイロンは唇を噛む。

そんな事を言いたいのではなかった。こんなに疲れているイーヴァルアイを前にしてわたしは何を言っているのか。

「手を離します、ヴァイロン様お許しを」

ラドビアスが一言ヴァイロンに断りを入れて貸していた肩を外すと、イーヴァルアイに駆け寄り背中 hands を差し入れて抱き上げる。

「少しお休みください」

「……ん」

「ヴァイロン様申し訳ありませんが少し失礼させていただきます」

ラドビアスはそのままだイーヴァルアイを抱いて広間を出て行った。

しかし十日間でこの島の大陸側の海岸線に結界を張ったとは本当なのだろうか。いくら小さい島国といえど……。しかし彼が力を使い果たすまで約束をこなそうとしているのは本当のようだった。信じるしかない。

ヴァイロンは左手で右手にはめた指輪を確かめるように触れる。

契約は交わしたのだから、今は……。信じるしかない。

次の朝、ヴァイロンが広間に行くとイーヴァルアイが竜門を潜るところだった。

「もう、体はいいのか」

「今は多少は無理をしなきゃいけない時期なんだ。行ってくる」

にやりと笑うがその顔は青白く、目の下にはくつきりと隈ができていた。重い気持ちで見送ってから何日も帰ってこないイーヴァルアイにヴァイロンはいらいらと日々を送っていた。

「こちらから連絡はつけられないのか、ラドビアス」

思ったより大声になる。

「つけてどうなさいます？」

ラドビアスが不思議そうにヴァイロンを見るのにますます苛ついて、やつあたりなのはわかっていてもラドビアスに大声で喚く。

「心配じゃないのか、おまえの主人なのだろう。あんなに憔悴した顔で行ってから十三日経つぞ」

ヴァイロンの切羽詰った声にラドビアスは、はっとして思いいたる。

「申し訳ありません、主は命に別状はございません。もし主の命にかかわる事がありましたらわたしにはすぐわかります。つい、自分がわかっているのでヴァイロン様のお心も同じであるかのように錯覚しておりました。ご心配だったのですね」

ラドビアスは深く頭を下げた。

「どうしてわかるのだ？」

ラドビアスの話にヴァイロンは興味を引かれて歩きまわっていた歩みを止める。

「はい、わたしには竜印がございますので」

「りゅういん？」

「これでございます」

胸元を大きく下げてみせたラドビアスの左胸には、血で描かれたような線で竜が翼を広げた形の痣がくつきりと浮かび上がっていた。「これでわたしは主と繋がっておりますので、何かあったらすぐにわかります」

「そうか」

思いの外苦い思いを抱いて搾り出すように言う自分の声にヴァイロン本人が戸惑う。イーヴァルアイとこの従者はわたしの立ち入ることのできない縁で結ばれているのだ。

ちりちりと胸が焼ける思いでヴァイロンは黙りこむ。

これは嫉妬だ。それほどに自分は孤独なのだ。誰にも立ち入ることの出来ない相手のいる二人に対してわたしは嫉妬している。待つことしか出来ない今の状態にヴァイロンは齒噛みする思っ  
いだっ  
た。

## 始動の時

夕日が縦に赤く長い光を窓から差し込んできた頃、イーヴァルアイが戻って来た。

「ひとまず……終わった」

そう言っただけで前回と同じく崩れ落ちるイーヴァルアイをヴァイロンは抱きとめる。

「しっかりしろ」

ヴァイロンの声に薄く目を開けたがすぐに水色の瞳は閉じられ力を失った体は人形のようにヴァイロンの腕の中に身を委ねられた。

「ヴァイロン様、後はわたしが」

手を差し出すラドビアスにヴァイロンは首を振る。

「わたしが連れて行く」

「はあ」

仕方ないですね。ラドビアスは小さく呟く。

「ではお願いします」

ラドビアスは扉を開けてイーヴァルアイを抱いたヴァイロンを通すと、先に歩いて寝台のある部屋の戸を開いて待っていた。主に関することで完全には手を引くことはしないラドビアスである。

寝台に寝かされたイーヴァルアイはあまりに静かで。何度もヴァイロンは口元に手をやって息をしているか確かめたくらいだ。血の気の無い蒼白な顔は表情のひとつも写しはしない。

結局、イーヴァルアイはその後三日も寝たきりでヴァイロンは寝台にずっと付き添っていた。朝方うとうとしていたヴァイロンは肩を揺すられて、浅い夢から目を覚ました。

「何をしている」

びっくりしたようにイーヴァルアイが眉を上げてヴァイロンを見



ている。

「起きるまでついていようと思って」

ヴァイロンの素直な応えに戸惑いながらイーヴァルアイが当たる相手を求めて後ろに控えているラドビアスを見た。

「ラドビアス、おまえ何だってヴァイロンに僕のようなまねをさせるんだっ」

「わたしがラドビアスに頼んだんだ、彼は悪くない。わたしがそうしたかったんだ」

ラドビアスに鋭い声をかけるイーヴァルアイにヴァイロンが静かに言つとイーヴァルアイを見つめる。

「何もできないから。これぐらいさせてくれないか」

「な、何を言つて……」

何かを言いかけてイーヴァルアイは口を閉じてぷいと横を向いた。顔色も戻つてわたしはうれしい」

「うっ」

イーヴァルアイの顔が引きつり、助けを求めるようにラドビアスを見る。

「わたしがいない間に何があつたんだ、ラドビアス。こいつ、何かおかしくなつてる」

まさか、ヴァイロン様がわたしに怏気<sup>りんき</sup>してなんて言えるわけがないじゃないですか。

「何もございませんでした」

含むことが大有りの顔で声だけはそつけなくラドビアスは答えた。

「ヴァイロン」

起き上がったイーヴァルアイは寝台の傍らに置いた椅子に座っているヴァイロンの肩に手を置いて立ち上がった。

「待たせたな、動くぞ」

「わかった」

ヴァイロンも立ち上がり二人は広間に向かおうとしたが。

「お二人ともお湯をお使いください、着替えたからお食事を」

「何を所帯じみたことを。やる気を削ぐようなことを言つな、ラドピアス」

「何、言ってるんですか。わたしが言わないで誰が言っんです。ヴァイロン様もぼさつとしてないで早くしてください」

「あ、はい」

追い立てられるように浴室にヴァイロンは放り込まれて体を洗い、髭を剃った。しかし、ラドピアスがいないと日々の日常的な事は何もできないことに気付いた。ヴァイロンは今までそんなことをする身分ではなかったし、イーヴァルアイときたら目の前に食事が出てくるのは世界の摂理だとも思っているようで何もしない。

もし、本当に二人きりだったら自分が細々と世話をしなければ立ち行かないだろう。

あの結界を張りに行っていた時、イーヴァルアイが飲まず喰わずだったことは想像にかたくない。

用意された服に着替えて続いて浴室に入るイーヴァルアイとラドピアスをちらりと見た。

「髪を洗うのは今日はいいい、乾かすのが面倒くさい」

「だめです、大体髪洗うのも乾かすのもやるのはわたしじゃないですか。あなたはじつとしていればいいんです」

「じつとしているのが……」

「だめです」

ぱたりと閉められた浴室の戸をやや呆れながらヴァイロンは広間へ向かった。簡単な食事を終えて机から食器を下げた後、イーヴァルアイがラドピアスを見る。

「ドリゲルトの軍は今どこにいる？」

「はい、ほぼ北にある国を倒して今はサイトス国に向けて南下している途中でございます」

ラドピアスがテーブルの上に地図を広げて指し示す。それにヴァイロンは驚いて声を上げる。

「こんな物をどうやって手にいれたのだ？」

詳細な地図というものは、その国の最大の秘密で国主と限られた者しか見ることなど許されない。それが島全体の詳細な地図などとは。

「サイトス国に先回りするか」

イーヴァルアイが言って印を組み『解』と呟いて地図をなでる。

すると描かれていたインクが浮いて蠢いたかと思うとさらさらとイーヴァルアイの手によって砂のように払われてしまった。そこにあるのは白地の羊皮紙だった。

「行くぞ、サイトスへ」

「わたしも行く」

「無論」

『アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよ、サイトスへ通せ』

印を組んで呪文を呼ばわったイーヴァルアイの前に現れる闇。

その中に黒い影が三体蠢いて一つに溶けたようになって目標への道を通し、三人は竜門をくぐった。

「気分はどうだ？」

「少し悪いがたいしたことはない」

ただ、歩いているだけなのにまるで輿に乗せられているような気分が足がふらつく。

「『鍵』を身に付けているのなら大丈夫だ、失くすなよ」

心配そうにヴァイロンの顔をのぞき込むイーヴァルアイはほれ、と自分の肩を差し出した。

「掴まれ、肩を貸してやる。ここで倒れたんじゃあ、後で面倒だ」

こんなに華奢な肩に体を預けたらそれこそ人数が一人増えて二人とも倒れて、そっちの方が面倒くさいことになりそうなのでヴァイロンはやりわりと断わる。

「もう、大丈夫だ。何か慣れてきたみたいだ」

「じゃあ、もつと普通の顔をしろ、ぼけっ」

自分の有難い申し出を断られて気分を害したイーヴァルアイが大  
声を出したところで。

「着きましたよ」

ラドビアスの声。

「着いた？ まさか……」

さつきからまだニザンほどしか経っていないではないか。

目の前が白っぽく光る。その光に向かってラドビアスを追い抜  
きそうな勢いでヴァイロンは竜門から飛び出した。竜門を開けた  
場所は城の中らしい。

「着いたって、ここはサイトスなのか」

「はい、竜道は距離と時間に縛られておりませんから。サイトス国  
の主城の中でしょう」

ラドビアスが答えるのに頷くと同時に感づく生臭いにおいと肉の  
焼けたにおい。その匂いの正体に気付いて思わずヴァイロンは膝  
を崩して部屋の隅に吐いた。

「すまない、もういい」

背中をさするラドビアスを制して立ち上がったヴァイロンは竜門  
を閉じているイーヴァルアイを見た。

「どうする？」

「ここでドリゲルトを待つ。どうせ暫くはわたしは何もできない。  
おまえとラドビアスに一働きしてもらおう」

「何もできない？」

「ここに誘い込んで相手が油断するまで術が使えないからな」

イーヴァルアイは薄く笑った。

「ドリゲルトの側には魔道師がいる。ここで魔術の痕跡があれば感  
づく程度には上級らしい奴だ。だからそいつを先に殺してくれ」

あっさりと殺すと口にするイーヴァルアイに傷ついている自分に  
ヴァイロンは自分の心を持て余していた。

今は戦乱の世で自分も何人もこの手で殺しているというのに。  
イーヴァルアイの口からその言葉を聞きたくないとは一体……？

「ではラドビアスも術が使えないのでは？」

「ラドビアスは剣と体術が使える」

何が気に入らないのかイーヴァルアイは嫌そうに言う。

「そうなのか」

「はい、多少は」

ラドビアスはにこりと笑う。

「わたしの主は魔術以外はまったく何もできませんが」

イーヴァルアイの冷たい視線をうけながら平然とラドビアスはそう言っただけで歩きだした。

## 人殺しが得意な魔道師

「ここに残った見張りの兵士を二人ばかり倒して潜り込みましょうか、ヴァイロン様」

陽気に言うラドビアスにヴァイロンがうなずいた。 やつと自分の運命のために自らが動ける喜びを感じている。 それが殺戮（さつりく）というものだとしても何もできないのをただ鬱々（うつうつ）としているのはまっぴらだ。

「その前にイーヴァルアイ様、着替えをご用意しますから少しお待ちを」

ラドビアスがそつと出て行く。

「着替えって？」

「わたしはドリゲルトの軍に虜（こ）になりに行く」

「な、何を言っている？」

イーヴァルアイは詰め寄るヴァイロンをまあまあといなしながら押しとどめる。

「ドリゲルトは侵略した国々の高貴な女たちを集めて国に連れて帰るつもりだ。兵士たちへの褒賞（ほうしょう）の品にでもするんじゃないか。まあ、それに紛れようかと。その方が目立たないだろ」

それはそうかもしれない。

それが顔にも出ていたのか。

「まあ、貴妃たちの中ではさすがに目立ってしまうかもしれないけどね、兵士の格好よりはましだろう」

イーヴァルアイはヴァイロンの表情を勝手に解釈する。

目立つのは男が女装しているからで……じゃないだろう、まったく。

「おまえの妃も捕まっているかもな、どうする？ 会ったら何か言っておく事があるなら聞いておくが」

弾かれたようにぎくりとヴァイロンはイーヴァルアイを見た。

結婚をして一年にも満たない月日を暮らした妃、アステベート。もう二度と会うことはないと思っていた。

城を出るときの彼女の言葉がよみがえる。

「モンド国の妃として死ぬなんて考えられませんわ。サイトスへ返してくださいませ。供を連れて今日のうちに城から出ます」

彼女は中央の大国、サイトス国の姫のままだった。父王の命で嫌々北の小国モンド国へ輿入れして来たものの気持ちはずっと変わらなかった。若いヴァイロンが矜持きょうじの高い妃を扱いあぐねているうちにどんどん二人の気持ちは離れていったのだ。

「余計なことはするな。わたしが魔道師を殺るまで大人しくしていろ」

ヴァイロンのきつい調子の返事にはいいとイーヴァルアイは楽しそうに返した。人の弱いところをつくのが余ほどおもしろい。いやな奴だ。

そこへ女物の衣装を抱えたラドビアスが現れた。それがこの城の衣裳部屋からの物なのか、死んだ女から脱がせたものなのかヴァイロンは考えなくなかった。

「これを。大きめなのを選びましたが」

早速、ラドビアスがイーヴァルアイの着ている物を脱がせ始めて、ヴァイロンは慌てて顔を背けた。分厚いローブがどりと床に落とされる音。下に着ている薄い絹のシャツのリボンを引き抜くしゅるっという音。そんなものに我知らず顔が赤くなってヴァイロンは頭を戻すことができないでいた。

「まあまあだな、しかし動きにくいな。何してる、ヴァイロン？」  
体に合っているのを確かめてイーヴァルアイが部屋の隅で壁に向いてかたまっているヴァイロンへ声をかける。

「髪を結いますので少しじっとしててくださいまし」

器用にリボンだけで髪を高く結び上げるとラドビアスは出来栄えを見るために二、三步後ろに下がってうなづく。

「よろしいようです」

それを聞いてイーヴァルアイは歩き出した。

「じゃあ、あとでな」

その声に振り返るヴァイロンは息をのんでイーヴァルアイを見つめた。

「気を……つけるよ」

「ああ、おまえも」

「目立たないようにお願いしますよ」

ラドビアスがちょっとお待ちをと、薄い透ける布を頭からふわりと被せるとイーヴァルアイは手を振って出て行ってしまった。

「では、わたし達も行くか」

「はい」

ドリゲルトは城壁に沿って何十人かの見張りだけを置いているらしい。二人一組の歩兵が北門側に五組ほど置かれている。南側は城の正門なのだからこの倍はいるだろう。やはりこちらで正解か。ヴァイロンは一人うなずくと身を潜める。そして城壁に造られている矢台のかけから兵士の見回りの人数、間隔、時間を見定めると、抜け出して東から来るラドビアスと合流する。

「東は兵士の宿舎がありました。西は送られてきた虜囚を捕らえている場所になって警備も厳重になっております」

ラドビアスの報告にヴァイロンは先程のイーヴァルアイとの会話を思い出して、西のほうに目を向けて急いで頭を振った。

サイトス国はこの島の中央に位置するのは勿論のこと。規模も大きくドリゲルト率いるルクサン皇国と海峡を挟んで隣国という位置にある。そのため、ドリゲルトはサイトスを落とした後そこを拠点にして軍を二手に分け、小さい領主国の多い南に信のおける將軍を南下させた。

ドリゲルトは比較的大きい国のある北に軍を率いて行ったのだ。各国で目ばしい貴妃、宝玉類などの財宝を略奪しながらサイトス



へ送りこんで軍がサイトスに戻り次第、海峡を渡るつもりなのだろう。

退屈している自国の將軍達の愛国心を燃えさせて財宝、土地を褒賞として与えて忠誠心を呼び起こす。国内で燻くすぶっていた不満も解消し、ルクサン皇国軍は戦いの最中ながら喜びの興奮に沸き立っているのだろう。

「退屈だなあ、後陣勤めもよう。見回ったところで何もないとわかつている場所の警備なんて」

甲冑姿の男二人組のうち若い一人がぶつぶつと隣の中年の男に愚痴っていた。

「小隊長に振り分けられちまったんだから仕方ない。しかしくらしよばい国の軍隊との戦相手だつて前線に行けば万が一にも命の保障はない。いくら頑張つたつて褒美をもらうのはお偉いさんばかりだ。俺たちにはここで楽させてもらおうぜ」

まだ若い連れに言いきかすように男は言った。

「だつたら西側が良かったぜ。運が良ければ女達のいる部屋の警備につける。前にちらつとだけ連行される女たちを見たがあれが俺たちの知っている女どもと同じ人間かと驚いたぜ」

遠い目をしながら若い男はそのときの光景を思いだしていた。

雪のように白い、本当にしみの一つない顔の美しい女たちだった。

一緒に連れて行かれる侍女たちでさえ自分の周りにいる女とは次元が違う、と思った。

生活が思い描けない女たち。日々の暮らしのこまごまとした雑事から切り離された世界の女たち。

「言っても仕方ないことは言わずにおくんだな」

中年の兵士はやれやれと突き放すように言々と歩みを速める。少ししたらだらし過ぎたようだ。

「おい、早くこい」

相棒の足音がしないのを訝しく思っ  
て男が振り向いたが自分の背後には誰もいない。

「おい、ど……」

男の声はそこで途切れ、背中を熱いものが突き刺さった。痛みと恐怖で叫び声をあげようとしたがその口は背後に回った人物によって塞がれる。と、同時に背中から引き抜かれた剣は今度は後ろから心臓を穿たず貫いて男は白目を向いてその場に倒れた。

ヴァイロンは血を払うように大きく剣を振りさばいて指輪に戻すと手にはめる。

「ラドビナス、鎖帷子くさりかたびらに穴を空けてしまった。目立つかな」

若いほうの兵士の首から短剣を引き抜いて、どさりとヴァイロンが殺した兵士の横に死体を投げたラドビナスが足でその男をひっくり返して鎖帷子を検分する。

「この鎖を切ってこちらに繋がれば大丈夫でしょう」

何でも無いように言うラドビナスは死体をついた。

「あの陰に死体を隠しましょう。申し訳ありませんがヴァイロン様はそちらの男を運んで下さい」

ヴァイロンに素早く若い兵士が着けていた鎖帷子を着せる。ラドビナス自身は、短剣の先を使って器用にヴァイロンの開けた穴を目立たなくした中年の兵士の鎖帷子どころか身ぐるみ剥がして着込んだ。

「わたしはローブ姿でしたから全部借りますよ」

死体をそのまま脱いだローブで包んで陰に押し込むとヴァイロンに向く。

「お待たせいたしました」

「ああ」

ヴァイロンは、ラドビナスの手際の良さにわずかに身震いして応じた。ヴァイロンの数少ない魔道師と対峙した経験の中でもラドビナスのような者はいなかった。大体今やっている事は、剣術と

いうより暗殺だ。 人殺しが得意な魔道師って……しかし。

ヴァイロンは自分の思いを振り切る。 今は考えても仕方ない。

「では行こう」

「はい」

二人は何事も無かったように決められた順路を巡回し、城へ向かう。

## 皇帝ドリゲルト

その頃、西側の虜囚<sup>りようごう</sup>を閉じ込めている広間。そこに漆黒の髪を高く結った色の白い二十歳前後の女が、西日を避けるように柱の陰で椅子に座っていた。女のいるその広い部屋には何十人も女が集められている。

それぞれが自分の親を殺され、夫を亡くし。身の周りの世話をする、いく人かの侍女だけを連れて行くことを許されて、自国から続々と送られて来たのだった。

同じ境遇のはずなのだが矜持の高い妃、姫達であるがゆえにおしなべて互いに仲が悪かった。そして、新しい虜囚が連れてこられるたびに厳しい目で値踏みをするのだ。

その日連れて来られてきたのは背の高い女だった。頭からすっぽりと薄物の布を被ってただ一人で連れて来られていた。

身分の低い者なのかしら。だとしたら一緒に部屋は嫌だわ。着ている物は薄汚れてはいるが、淡い紫の絹織物で作られていて下賤<sup>げせん</sup>の者が着る物ではない。

そんなことを考えながら眺めていると、その女がこちらを真っ直ぐ見ていた。ちらりと薄物からのぞいた口元は確かに笑っている。アステベートは、驚いて顔を背けて胸を押さえた。

何なのだろう、あの女は。あんなふうになまに人の顔を見てあんな笑みを浮かべるなんて。アステベートはもう一度そつと伺うように女を見る。

その女は先程のまま、にたりとした笑みを浮かべてこちらを見ていたかと思うと、するりと頭から薄物を取った。

その顔の何と麗々しいことか。ミルクに薔薇の花を溶かし込んだような肌。細く優美に弧を描く眉の下に長い睫毛に彩られた水色の瞳。小鼻のすっきりした高い鼻。しかし、薄い唇の両端が吊り上げられたように半円を描いている所為で、その女を酷薄な顔

に見せている。

化粧もされていないのに目が話せないほどの磁力を持つ完璧なバ  
ランスで構成されている女。 アステベートはいつの間にか、同性  
ながら引き込まれるように見とれていて自分に気付いた。

「アステベート様、どうかされましたか」

「何でもないわ」

侍女の声に冷静さを装ってアステベートは何とか答えたが。

「アステベート様」

再び声がかかる。

「何なの」

苛ついてうるさいと侍女に言おうと侍女に向いたエステベートは  
固まる。 侍女の背後にはあの新入りの女が嬌然<sup>えんぜん</sup>と笑いながら立っ  
ていた。

「おまえは何者です」

睨みつけながらアステベートが言うのに横から侍女も加勢するよ  
うに口を出す。

「こちらはサイトス国のアステベート姫様ですよ、いきなりお側に  
よるとは無礼でしょう」

モンド国の妃などと言わないところが、サイトスからモンドへ興  
入れする時に連れて行った侍女たる矜持なのかもしれない。 侍女に  
しても自分の主人が格下の国への嫁入など口惜しくてならな  
かったのだ。

しかし女は侍女の言葉など聞いていないかのようにするりと交わ  
して、アステベートのまんに立つ。

「お初にお目にかかります、アステベート様。 モンド国のヴァイロ  
ン様の后妃であられると思っていましたのにわたしの思い違いでし  
たか。 では、お会いしても無駄だったかも」

「どういう事です？」

「わたしはヴァイロン様の存知よりの者でございますから」

ヴァイロンの名を出されて啞然とするアステベートを残して女は

さつさとその場を離れて行った。

「待ちなさい、一体お前は何者なの？」

思わず立ち上がった後を追おうとしたが侍女に止められる。

「御止めください、皆が見ております」

はっとしてアステベートが周りを見回すと他の女達が興味津々で注目しているのが見てとれて、いらいらと座りなおしてアステベートは唇を噛んだ。

ヴァイロンの存知よりってどうということなのか。ヴァイロンの思い人ということ？ だからヴァイロンはわたしを愛そうとしなかったのか。

ヴァイロンのいつも見せる困ったような顔をアステベートは思い浮かべた。あの時だってヴァイロンは出て行くと行ったわたしを止めることもしなかった。

あの女のせいなのか。

婚礼の時に初めて顔を合わせたときの喜びを素直に表すことなくて自分には無理だった。

あんな凜々しい顔を、髪を今まで見たことがなかった。銀に近い月のようなブロンドの髪に深い藍色の瞳。嬉しくてならなかったのに、いやだからこそ優しくできなかった。自分のほうが好きになっていなんて我慢がならなかったのだ。重苦しいほどの恋情と矜持の板ばさみになって毎日が苦しかったというのに。アステベートの殻のその奥をヴァイロンはのぞこうとはしてくれなかった。やっぱり悪いのはヴァイロンなのだ。

「名前さえ名乗らなかった」

アステベートは齒噛みしながら女の消えた方を睨んだ。そこへ、侍女の声が聞こえる。

「何やら外が騒がしいですわ。もしや、ルクサン皇国軍の主軍が帰城したのでは」

小さく言った彼女の声に部屋中の空気が一変する。今まで囚われの身にも関わらず、お互いに牽制しあったりいつもの女同士の

些細な戦いをしていた女達は自分たちに訪れる現実を思いだして黙り込む。その中で落ち着いた様子で窓から外を眺めている女がいた。「やっとご到着か。早く迎えにきてほしいな、女どもの匂いで気が狂いそうだよ」

不平を言つと口をとがらして頼杖をつく。ドリゲルトの率いる主軍が帰城したのは先触れの早馬から二刻ほど後の夜の帳が降りた頃だった。

上機嫌のドリゲルトは側に控えている茶色のローブを着た男から酒の入った杯を受け取ると一息に呷って空の杯を男に渡した。

「ガウシス、この遠征は大成功だったな」

「左様でございますな、最初は陛下自らご出陣されると聞いて大変心配いたしました」

そんな心配が馬鹿らしくなるほどこの島の国々は容易かった、のだ。

「退屈な会議よりわたしはこちらのほうが性に合っている。毎日おもしろくてならなかった」

大きな口で笑う大男、ドリゲルトを横目に見て魔道師のガウシスは顔をわずかに顰<sup>ひそ</sup>めた。残虐な事をことさら選んで嬉々として行う皇帝に底知れぬ恐ろしさ人間として何かが欠けているのでは、という危惧。しかし賢明にもガウシスはちらともそれを顔には出さない。

「今宵はお疲れでございましょう、お休みください」

「まさか、馬に乗っていただけでわたしが疲れるわけなどないだろう」

ガウシスにドリゲルトは不満気に言った。

「と、仰られますと？」

ドリゲルトは逞しい肩を震わせて大きく笑う。武王として知られた先王に負けず劣らずドリゲルトは戦争好きだった。並みの男より頭二つは上背があり、首は細い女の腰ほどもあるつかというほど太い。胸板も厚くドリゲルトの扱う剣は常人では持ち上げるこ

とさえ敵わない。父親の戦闘好きの性格に父親ほどの狡猾な頭を持たない息子。つい、三年前に玉座についてから言いがかりのような理由をつけて近隣の国と戦っていたが、今はそれが全てうまく転がって国土の拡大に国は沸いている。しかし、何時までもこんな国のあり方が通用するはずがない事をドリゲルトにはわかっていなかった。

その横で愛想笑いを浮かべているのは暫く前に大陸の東にある魔道教の総本山、バーオーク自治国から派遣された魔道師だった。

策士としてドリゲルトに仕えるガウシスの薦めを受けての今回の遠征である。

「今から今宵、わたしの寝所に侍る女を見に行くぞ、おまえはどうする？」

立ち上がった王に頭を垂れてガウシスは断りを入れる。

「わたしは女を抱けません。戒律がありますので」

「そうだったな」

ドリゲルトは気にする風でもなくガウシスを見た。ガウシスは頭を垂れたまま、密かに溜息をついた。この不毛なやり取りを何回続ける気なのか。戒律のことを何回言ってもこうやって嫌がらせのようにこの王は口にするのだ。

「では酒でも飲んでいろ」

言い放つと大股で西側の虜囚を入れている部屋に向かう。部屋の外にいた兵士が王に気付いて頭をさげるのを見もせず、扉を一気に押し開けた。

しんと張り詰めた空気を切り裂くような悲鳴が上がる中、ドリゲルトは舌なめずりをしながらゆっくりと歩いて行く。主人を庇おうとして目の前に飛び出した侍女の一人が手甲のついた手で振り払われて壁にぶつかり血を吐いて動かなくなった。主人である若い女は顎を掴まれて持ち上げられた後、真横に放りなげられる。

女たちの息を呑む音が聞こえるほど女たちは怯えきって歯の根が合わないくらい震え上がっていた。その表情さえ楽しそうに見な



がらドリゲルトは最奥へ向かう。

とりあえず、手近な女にするか。

そう考えたところに見えたすらりとした姿。

「おまえ顔を見せろ」

しかし、その女はあろうことが微かに舌打ちをした。

「おい、おまえだ。今宵の伽ときを命ずる。光栄に思え」

ドリゲルトはその体軀に似合わず、素早く女に近寄るとあつと言  
う間に肩にかついで部屋を出て行く。そして片手で殴るように扉  
を開けるとかついでいた女を寝台に投げ落とした。

## 魔道師と刺客

「痛っ、それにしてもラドビアスに怒られるな……」

女が小さく呟く。

「顔を見せる、無礼な奴だ」

ドリゲルトが頭から薄物を引つ手繰るように取ったせいで髪に巻いたリボンがほどけて、亜麻色の長い髪が華奢な背中に流れるように落ちた。

「美しいな」

どんな言葉で嘲ってやろうと思っていたドリゲルトの口からぽろりと素直な言葉が漏れた。ところが女の口からは辛辣な言葉が飛び出す。

「無粋な男だな、ドリゲルト。顔も下品だがやることも下品だ」

「何をっ」

一瞬で心を奪われたと思った女からの馬鹿にした言葉にドリゲルトは逆上する。ドリゲルトは寝台の上に荒々しく上がって来ると女の亜麻色の髪を掴んで引き倒し、女の口を奪った。もがいて顔を背けた女の口の端から血が滴る。

「外見も中身も獣だな。最低だ」

やっと唇を離れた途端、平然と言われてドリゲルトは羞恥に我を忘れて女の服の襟元に手をかけるとそのまま服を腰のところまで引き裂いた。

そして 手が止まる。

「おまえ男か」

目の前に染み一つ無い白い体をさらしているのはどう見ても女では無かった。見られるほど美しい顔をしているがその胸は平らで薄い少年のようだ。

「わたしは自分から女だと言った覚えはない」

そう言って男はドリゲルトを見上げて口の端をつりあげる。

女に紛れ込ませた刺客か？

「まあ、良い。女でも男でも楽しんでやる」

ドリゲルトの言葉に女に化けていた男、イーヴアルアイは初めて狼狽し、顔色を失くして逃げ道を捜して目を彷徨<sup>さまよ</sup>わせた。

あのご面相で美しい女や男に目がないのだから始末に負えぬ。きつといつか色事で痛い目にあうのではないか。酒瓶の半分を

飲み干してガウシスは一人ごちた。

「ガウシス様大変でございます」

慌てた様子で扉を叩く音がしてガウシスは急いで酒瓶を寝台の脇に隠すと扉を開けた。

「何事か」

「賊の侵入でございます」

「陛下の御寢所に賊が」

ガウシスは足を縛れさせながら外へ出てきた。

「警備のものはどうした？ 陛下の御体は大丈夫なのか」

ベオークのきつい魔道師の戒律を守る生活からやっと王宮付きの役目をもぎ取って楽ができる、と思っていたのに王がこんなに早く死んでしまったら。ベオークに呼び戻されて厳しい咎めを受けるのは必至だ。

恐慌した頭を抱えたまま、呼びに来た二人の兵士を従えてガウシスは慌てて王の寢所に走った。

重い。

一方、ドリゲルトの寢所に連れ込まれた上に、巨体に押し掛けられてイーヴアルアイは息が出来ずに浅い呼吸を繰り返していた。どうにかしたいがあまりの体重差に暴れても何の足しにも成らなかった。それよりなにより、男に組み敷かれている状況事態がイーヴアルアイの思考を奪っている。恐ろしくて恐ろしくて仕方なかった。あの時のことを……。

自分が生まれた国を飛び出すきっかけの出来事が甦ってそれだけ

で体が硬直してしまう。

叫びたくなるのを堪えて目を硬く閉じる。

「陛下っ」

扉を大きく開ける音とガウシスの大声が同時にした後、兵士がばたばたと部屋に入って来てドリゲルトは体を起こした。

「何の用だガウシス。せっかく楽しんでいたというのに」

「は？ 陛下のお部屋に賊が入ったと……」

顔色を失くして後ろの兵士を見ようと振り返る。

「はい、ここに今賊が」

兵士の一人が言い終わらぬ内にガウシスの体を剣で斜めに斬った。

「謀られた……か」

ガウシスは呪文を唱えるがそれはもう一人の兵士の短い反呪の応えによって効力を失う。

「おまえ 魔道師だったのか」

寝台によると近づくようとしたガウシスを剣を持った兵士が再度斬りつけた。

「ドリゲルト……様」

倒れたガウシスの体から血が流れて広がる。その血溜まりに手を浸したもう一人の兵士は見る間に姿を変える。死に行くガウシスの前にいるのは思慮深い顔をした老いた男の姿。

「お久しぶりです」

かすむ目と頭に浮かぶ顔と名前、北の小国の宰相イベント。数ある小国の情報と実情を驚くほど把握し、ドリゲルトが全島を掌握したあかつきには高い地位を望んでいたはずの。

では初めから仕組まれていたのか、王に御教えしなくては。

しかし、そこで彼の思考も命も尽きてしまった。

呪をかけたのか、ガウシス以外はラドビアスの姿が変わったことに気づかなかった。ラドビアスは血溜まりに付けていた手で扉の内側に呪文を描いていく。

「結界を張りました、ヴァイロン様」

ラドビアスはしゃがんでガウシスのロープで手を拭う。

「ドリゲルト、わたしはモンド国国王、ヴァイロン・クロード・ヴァン・レイモンドールだ。おまえに奪われたものを取り返しに来た。覚悟しろっ」

ヴァイロンが大上段に剣を構える。

「モンド国だと？ そんな国があつたかな。何しろ数え切れない程の小さい城を落としたからな、覚えてられんな」

にやにや笑いながらドリゲルトが起き上がって言った。

「おまえらこのわたしを殺すつもりか、反対に殺してやるぞ。なぶり殺してもいいがわたしは今楽しみの途中だつたからな。すぐに殺してやる」

「イーヴァルアイ」

そこでドリゲルトの寝台の中にいるのがイーヴァルアイと気付いてヴァイロンが呻く。

「イーヴァルアイ様、いつまで大人しくやられているんですか、あなたはっ」

ラドビアスが大声を出す、その声にはかなり怒りが入っていた。しかしその声がイーヴァルアイの呪縛を解いたようだった。

「何でわたしを怒るんだよ、まったく」

身を素早く起こすとイーヴァルアイが印を組んでドリゲルトの背中に触れた。

『縛せよ』

おまえ、何を、と言う声はドリゲルトの口の外へは出ていかなかった。後ろ手にイーヴァルアイを掴もうとしたドリゲルトの顔がこわばる。見えない鎖で全身を縛られているかのように体が自分の意思に反して指の先ほども動かない。

そこへヴァイロンが剣を振り下ろす。がその剣は空を斬って寝台の敷布に突き刺さる。それがイーヴァルアイがドリゲルトを庇って咄嗟に体当たりしたためだと気がつくまで少しの間があつた。

「どうということだっ、イーヴァルアイ」

詰め寄って肩を掴む。

「離せ、わたしの話を聞けヴァイロン」

顔を歪めるイーヴァルアイのむき出しの体のあちこちに残る痣に気付いて、ヴァイロンは掴んだ手を慌てて離れた。

## 傀儡の王

「この男はまだ使える。こいつの軍もそのまま使う事になる。気持ちはわかるがもう暫くがまんしてくれ」

手を離れたヴァイロンに代わってイーヴァルアイの手がヴァイロンの肩にそつと置かれる。

「信じる　悪いようにはしない」

「くっ……わかった」

ヴァイロンは『鍵』に命ずる。

「変じよ」

剣は指輪に変わり主の指に納まる。

「それにしても酷くやられたな」

ヴァイロンはイーヴァルアイの体を見て自分の身におきたかのように傷ついた顔になる。

「目立たないようにお願いしておりましたのに何でドリゲルトの寝所におられるのがあなたなんですか」

頭から湯気を出しそうな勢いでラドビアスの小言が始まる。

「奥のほうに潜んでいたんだよ、本当だってば　まあ、今回はさすがにあせってしまったが」

今回は、ということはこんな事が前にもあったのか。痛いからよせ、と水で濡らした布で体を拭くラドビアスに文句を言っているイーヴァルアイを啞然とヴァイロンは見つめた。

「あの男の匂いがしみておりますよ、わたしはまだ許しておりませんからね」

「痛いっ、匂いだと？　そんなもの知るかつ、おまえに許して貰えなくて結構だよ」

「何でもいいですけど大人しくなさっていて下さい。わたしは服を持ってまいりますから」

ラドビアスの関心は主が上半身はだかである一点に向いているよ

うで、印を組むと早口で呪文を唱えると竜門を開ける。

「では行つてまいります」

「香を持つてきてくれ」

はい、と返事もそこそこにラドビアスは開けられた闇に消えた。

「竜門は誰でも開けたり通つたりできるのか」

「竜印のある者が、王ならな　だが何とかして他の魔道師も将来的には通れるようにしなくてはな」

ヴァイロンの問いにイーヴァルアイは首を傾けて答え、目線を転がされているドリゲルトへ向けた。

「無理やり人を支配するのが好きだよな。では逆はどうなんだ？  
好きだといいいんだが」

血走つた目を向けたドリゲルトの腹に蹴りを入れるとイーヴァルアイはヴァイロンを呼ぶ。

「血がいる、ヴァイロン手伝つてくれ」

倒れているガウシスの腕を指差して店先で物を買うように言う。

「これがいる。肩口から斬つてくれ」

「わかった」

何が始まるのかと思ひながら『鍵』を剣にすると、ヴァイロンは叩くようにして腕を切り落とした。

その腕の切り口を下にして流れる血をさつきまでドリゲルトが使っていただろう杯に受けていく。血は溢れて杯を持つイーヴァルアイの腕にも赤い模様を描いていく。

そこで用済みになつた腕を放り投げると、部屋の中央に指を杯に度々浸しながら魔方陣を描いていく。一心不乱に作業を進めてよしつ、と言ひながら立ち上がった。

「ラドビアスが戻つたら二人でこの男をこの魔方陣の真ん中に置け。開けてあるところを通るんだぞ、線を踏んで消すなよ、ヴァイロン」

「何をするのか見てていいか」

「だめだ」

ぱしりと断られて慥然とするヴァイロンに気付いてイーヴァルア



イは小さく舌打ちをする。

「わたしは……」

「一緒にいると気が散るし、術に巻き込まれる恐れがあるからだ。そんなお預けをくらった犬みたいな顔をするんじゃない」

ヴァイロンが言い返そうとした時、竜門が開いてラドビアスが戻ってきた。

「あーあ、なんですか、また汚して」

ラドビアスにまた小言を言われながら体を拭われて黒いローブを着込んだイーヴァルアイはラドビアスに手を差し出す。

「はい、持つてきました」

イーヴァルアイはラドビアスに渡された香炉に火を呪でつける。それを見てラドビアスは手筈を知っているのかドリゲルトの所へ行く。

「足をお持ちになっただけですか、ヴァイロン様」

だらりとしている大男を運ぶのは大仕事だったが何とか運び終えると、イーヴァルアイが魔方陣の外側から開けていたところを描き入れながら内側に後ろ向きで進んで行った。

「出る、二人とも」

「はい」

ヴァイロンはラドビアスに促されて、目をあけっぱなしにして口から涎を垂らしているドリゲルトとイーヴァルアイを残して部屋を出た。

「ドリゲルトを傀儡の王にして完全に全島を支配できましたら、もう一度大きい術式で軍全部を傀儡の軍とします。何、自国の軍ができるまでの措置ですよ」

軍全部だと？ ではそれには何人の血が要するのか。それはどこから調達するのか。

ラドビアスの説明にヴァイロンの背中にひやりと冷たい汗が流れる。

半刻ほど後、扉が開いてヴァイロンはラドビアスのあとに続いて

部屋に入る。香炉から放たれた独特の香の香りが頭を痺れさせて、軽く頭を振って前を見ると円の中心にドリゲルトは身を起こして静かに座っていた。

「わたしはヴァイロン様の命に従います」

「明後日にも南からイール將軍の率いる軍が帰城する。うまく欺け、できなければ殺せ」

「はい、仰せのままに」

ドリゲルトが頭を床に着けるのを見てヴァイロンはイーヴァルアイに顔を向けるとそれに対してどうだ、と言わんばかりにイーヴァルアイはにやりと笑った。

湯を使つて体をきれいにしたヴァイロンは寝ようと寝台に横になったがなかなか寝付けないでいた。ガウシスに擬態したラドビアスはドリゲルトに付いて行ってしまう。この部屋にイーヴァルアイと同室にしたのはイーヴァルアイの体を心配してのことだったのだが。

「では、おやすみ」

ヴァイロンの横にするりと入ってきた、イーヴァルアイがヴァイロンは気になってしょうがなかった。

## 心に溜まっていくもの

しかし、寝息をたてて寝ているイーヴァルアイの寝顔を見ている内にヴァイロンもうとうとしていつの間にか眠りの中に落ちていたらしい。

「タスケテ、ダレカ、タスケテ」

聞きなれない言葉に、何の声かと目を覚ましたヴァイロンは隣のイーヴァルアイがうなされているのに気付いた。

「ウワア、ダレカ、ハヤク、タスケテ」

何を言っているのかはわからないが、ここは起こしたほうがいいとヴァイロンはイーヴァルアイの両肩を持って大声を出して揺する。

「おい、大丈夫か。おきろっ、イーヴァルアイ」

ヴァイロンの声に目を開けたイーヴァルアイが両肩を掴まれている状態に気付いて騒ぎ出す。

「ワア、ハナセ、サンテラ、ドコダ、サンテラ、タスケテ」

「おい、しっかりしろっ。目を覚ませ、おまえは夢をみていたんだっ」

「夢？」

ヴァイロンは、やっと焦点の合ってきたイーヴァルアイに言い聞かすようにゆっくり言ってる。

「そうだ、夢だ。おまえは夢を見ていたんだ」

「そうか 嫌な……夢だった」

大きく息を吐いて上半身を起こすとイーヴァルアイは両手で顔を覆う。肩が震えているのでヴァイロンはイーヴァルアイが泣いていると気付く。しかし、声を押し殺しているのか、それはあまりにも静かだった。

「おい、声を上げて泣け。そんなふうになっていると心の中に溜まっていくばかりだ」

「うるさい、じゃあ胸を貸せ。だったらそうしてやるっ」

こんなときでも素直に言えないのだなとふいにヴァイロンは笑いそうになる。わんわんと子どものように泣くイーヴァルアイの背中をとんと叩きながら、ヴァイロンは少しばかりほっとしていた。自分にも守ってやらなくてはと思う者ができたという喜びが心を満たす。そんなことを口にすればイーヴァルアイは烈火のごとく怒るだろうが。

「落ち着いたのか、だったらもう寝ろ。これからいつでも胸を貸してやるから」

「こんなことが二度もあつてたまるか、ぼけっ」

ヴァイロンが泣き止んだのに気付いて話しかけるが、立ち直ったイーヴァルアイが不貞腐れたように言ってヴァイロンに背中を向けた。こういうところは本当に子どもっぽい。

「おまえ、歳はいくつなんだ？」

「十八だ、もうすぐ十九になる。だから何なんだ？ おまえは二十一歳だろ、それくらい知っている……で、一体何だ」

イーヴァルアイの答えにやはり自分より下だったのかとヴァイロンは、何だかほっこりと嬉しくなって目を閉じた。

「ヴァイロン？ 寝たのか」

返事が無いのに慥然とするイーヴァルアイはそのまま月明かりに照らされているヴァイロンの寝顔を見ていたが、そっとヴァイロンの頬に触れる。

「何で急に触れなくなっただろう……わたしにとっておまえは何なのだろう？」

身じろぐヴァイロンの頬から手をどけるとその手を自分の頬にあてて、イーヴァルアイは長い間じっとしていた。

あくる朝、目を覚ましたヴァイロンは傍らで寝ていたはずのイーヴァルアイがいないのに気付いて部屋をみまわす。触れると冷たい布の感触。

そこへノックの音がする。

「お目覚めでしょうか、ゴーラ子爵様」

「ああ？ 入れ」

「おはようございます、朝食を運ばせてもよろしいですか」

ヴァイロンは兵士の声に自分の存在がゴーラ子爵としてドリゲルトの軍に認知されているのを知る。

「陛下は？」

「はい、ガウシス様と一緒には今朝餉の膳の途中でございましたか」

「他に誰か いなかったか。他の魔道師とか」

「いえ、ガウシス様だけでございますが」

「誰かお探して？」

「いや、何でもなし。食事を頼む」

畏まって兵士は下がって行った。誰が用意したのか机の上には兜、鎧、具足、下に着る衣類からマントまで用意されていた。

ヴァイロンは食事を済ますと兜だけ置いて身に着けてマントを羽織ると王の居室へと急ぐ。王の居室の前には左右に三人ずつの兵士が槍を構えていたがヴァイロンを見ると石突きを床に打ち付けてヴァイロンを通した。

「ゴーラ子爵様がおいでになりました」

「入られよ」

その声に扉が開かれてヴァイロンが入るとラドビアスがきつちり扉を閉めて声をかける。

「おはようございます、ヴァイロン様。明日、イーエル将軍が帰城します。わたしが会ったのちにご紹介いたします で、イーヴァルアイ様の居場所ですか、お知りになりたいのは？」

「 まあ、どこにいる？」

「竜道で廟にお帰りですが」

「昨晚、様子がおかしかったから心配なんだ」

ヴァイロンの言葉にラドビアスが首を傾げる。

「朝お会いした時はいつもと同じ御様子でしたが。何かあったんですか」

「いや、すごくうなされて。いつもあなのか」

「そうですか。いえ、ここ最近はないと聞いておりましたのに」  
シヨックをうけたようにラドビアスが溜息をついた。

「サンテラとは誰のことだ？ 何回も口にしていたんだ。名前じゃないかと思ったんだが。おまえ達はこの島出身ではないのだな。イーヴァルアイがうなされていた時に発した言葉はアーリア語ではなかった。一体以前にイーヴァルアイに何があったんだ、ラドビアス？」

強い調子のヴァイロンの言葉にラドビアスはさらに溜息をつく。

「主が御自分で仰らないことをわたしと言えるわけがございませんがヴァイロン様はそれでは納得されませんか？ わたしのことならお話します」

「おまえのこと？」

「はい、サンテラとはわたしのことですから、そして主のことにも関係ありますし」

言ってラドビアスは薄く笑った。

「この島へ来る前、わたしはベオーク自治国という国にいました。出身はハオタイ国の西です。何のわけがあったのか今ではわかりませんが、わたしはベオークの中心、教皇の居城である朝陽宮の食糧庫の檻の中にいました」

「食糧庫？」

「はい、カルラ……いえ、イーヴァルアイ様の二番目の姉君は人食の趣味がおありですので」

ヴァイロンは驚いて声も出ない。それを見ながら人事のようにラドビアスの話は続く。

「同じ檻にいた同じ年頃の子どもと五人で何とかその檻から逃げ出したんですが……」



## ラドビアスの回想

そう言つてラドビウスは静かに話し始める。

逃げ出したものの、すぐに厨房の見張りに見つかつてしまった。

ラドビウスは一緒に逃げ出した髪の毛の黒いハオ族の子どもと手を取り合つて、広大な果樹園の中を走りに走つた。後ろからは大人の怒鳴り声と子どもの泣き声が聞こえてくる。もう、だめだと足を止めたその時、ふいにのびてきた手に掴まれ横に引つ張られた。

「しつ、静かに。おまえ達こっちにおいで」

手を掴んでいるのは自分と変わらない年頃の少年だったが、着ている衣服はつるりとすべらかで自分たちが着ている麻の物とは比べ物にならない。前に行く少年の亜麻色の髪がいい匂いをしている、と場違いな感想をいだきながらラドビウスはハオ族の少年とともに葡萄棚の下を小走りして続く。

「ここまで来たら大丈夫。おまえたち、助けてやるよ」

くるりと振り返つた少年のあまりの美しさにラドビウスはぼうと見とれた。

「助けるつて？」

「うん、おまえたち、わたしの僕にしてやるよ。今日、わたしはともうれしいことがあつたからね」

大人びた口調の少年は晴れやかに、とてもうれしそうに笑つた。

「今日、わたしに弟が生まれたんだ。だから、無益な殺生は今日は止めるようにビカラ兄様からハイラ姉様に言ってもらおう。ついでにわたしが僕を持つことも頼むよ」

「あ、ありがとうございます」

ラドビウスとハオ族の少年は頭を地面につけて礼をする。

今自分はとても偉い人と話しているのではないか。でも、しもべとは何なのだろう、ここでは使用人のことをそう呼ぶのかな。そんな事をラドビウスは思った。ハオタイ国の共通語は範字で



ここ、ベオーク自治国も範字を使っているため少年の言っていることはわかるにはわかる。だが、ラドビアスのいたハオタイ国の西、ダルファンは大陸の西側に近い。民族もハオ族ではなく西側の国に多い白人種で、言葉も普段使うのは古代レーン文字から発展したというアーリア語だ。細かい言葉の意味はわからないのかもしれないと、美しい自分の雇い主になるはずの少年を見た。

「じゃあ、おまえは今日からサンテラだ、そっちの子はインドラ。よろしくね」

そう言っただけの方は水色の瞳で笑いかけてくれた。たしか十歳になった頃の事だ。

昔の記憶の縁から戻ったようにラドビアスは、軽く瞬きをすると言葉を継いだ。

「そのお方はイーヴァルアイ様のすぐ上の兄君でバサラ様と仰います。わたしはバサラ様に命を救って頂き、僕としてお側に仕えておりました」

「今は違ふのだろうか？」

「わたしはバサラ様を裏切ってイーヴァルアイ様の僕になりましたので、この島に來たときに名前を変えたのですよ」

裏切ったと、言うわりにラドビアスはうれしそうに続ける。

「いつもサンテラと言うとつらそうな顔をするんだな。おまえ親からもらった名前は何か？　そう、仰ってイーヴァルアイ様が元の名前にしろと。ラドビアスは親から貰った名前です」

ラドビアスの話しが終わり、ヴァイロンは何から口にしようかと一旦開けた口を結局何も言えずにつぐんだ。

ラドビアスの数奇な運命とベオーク自治国の教皇一族の話、おそらくその一員であるイーヴァルアイの事。何から何までヴァイロンには信じがたいことだがラドビアスが嘘を言うとも思えない。そのベオークでイーヴァルアイに何があったのか、ますます気にな

るがこれ以上は何も聞けないだろう。

「さあ、これからの算段をいたしましょうか」

さばさばと言ってラドビアスはドリゲルトを手招く。

「おまえも聞くのだ、こちらへ来い」

その日の午後、早駆けの馬によってイール將軍の帰城が今晚遅くなる<sup>ことになる</sup>ことが知らされて、その支度<sup>しよど</sup>に城中が慌ただしくなる。

將軍が帰城するとほぼこの島国は掌握されたものであるといえる。深夜、地響きと共に騎兵が一千五百、歩兵が二千の大軍がサイトスへ入った。城内に入りきらなかった雑兵は城下の貴族らの屋敷へと分かれて宿舎とすることになった。ドリゲルトが先に連れ帰った兵たちのいる城下の町中には、松明の明かりが灯され満月の下に<sup>に</sup>いるようだ。

「我が敬愛する皇帝陛下、久しぶりに御尊顔を拝見し、お健やかなることを得心<sup>こころ</sup>いたしまして真に嬉しく存じあげます。お任せ下さいました南の国々、ことごとく我らの軍下に降り属国になりました」  
ドリゲルトに比べると線が細い<sup>こ</sup>が一般的に見れば偉丈夫の部類に立派に入る逞しい壮年の男、イール將軍が片膝についてドリゲルトに帰城の挨拶をする。

「大儀であつたな、イール。よく勤めを果たしてくれた。この度の功績、覚えておく」

「有難き幸せにございます」

そう言つてイールは不信そうに顔を上げる。

いつもより寿<sup>ことほ</sup>ぎが素っ気無い気がする。いつもはもっとざつくばらんに肩を叩いて大喜びを隠そうともしないのだが。それにガウシスの横にいる若造は一体誰だ？

「予定よりお早い御帰城に首尾の上々な様子がわかります。まずはごゆるりと旅のお疲れをいやされますよう」

「うむ、してそちらの御仁はどなたかな、ガウシス卿」

ガウシスに厳しい目を向けてイールが問う。

「このお方は右將軍ゴーラ様の嫡男、ヴァイロン様でございます。この度陛下を助けて多大な功を挙げられたことでお側に迎えられておいでなのです」

「ゴーラには確かに嫡男がいたが、この戦に来ていたとは」

それなら自分が知っているはずと胡乱うろんそうに若い男を眺めると男は人好きのする顔をにこりとさせた。

「小さいころにお会いしたきりでございましたが、イール將軍閣下。以後、お見知りおきください」

愛想良く挨拶をする若い男にいぜん腑に落ちない思いをいだきながらも肝心の陛下がそれを許しているのだからと一旦は納得するが、自分が帰ったからにはベオークから間諜かんちょうまがいまがいに送られたガウシスやぱつと出のゴーラの息子なんぞを陛下のお側に侍らせておくまいよ。

イールはドリゲルトにべったりと側づいている二人を寸の間睨みつけて自分へ用意された宿舎へ案内されて出て行った。

## 妃、アステペート

「信じていたろうか、少し疑っているようだったな」

「そうですね、術をかけときますか」

仕方ないですねと呟くラドビアスにヴァイロンはうなずく。

「早いうちに頼むよ」

「おや、お戻りです」

ラドビアスの嬉しそうな声に振り返ると漆黒の闇が現れていた。  
そこから亜麻色の頭が見える。

「二日後やつてしまおうか、ラドビアス」

そう言つてヴァイロンの顔を認めて、イーヴァルアイはにこりと笑つた。

「明日の深夜までに城下町のはずれまで結界を張りに行つて来る。  
女達を頼むよ」

「はい、お氣をつけて」

そのまま行こうとするイーヴァルアイをヴァイロンの声が止める。  
「待てイーヴァルアイ」

「何だ」

「女達というと虜囚りようしゅうになつてゐる者たちのことだな。どうするつもりだ？」

「だからさつさと行きたかつたのに」

イーヴァルアイは溜息をついてヴァイロンから目を逸らせた。

「軍全体を傀儡かいらいにするんだ。その先を聞いたとしておまえ、何とする？」

やはりそうか。

そうだと思つても割り切れない。自分のためだとわかつてゐるのに無慈悲な事を淡々と行うイーヴァルアイを非難してしまう卑怯な自分自身。その上、理不尽だとしてもイーヴァルアイに怒りを感じて苦しくなる。

「言つたろ、わたしがおまえの見なくていい所を補うのだと」  
言い捨てるようにイーヴァルアイはヴァイロンの言も待たずに竜門に潜つて行つた。

一方、捕らえられていた女達も大部屋から各部屋に移される事になり、長い行列を作つて歩かされていた。その様子を部屋の窓からぼんやり眺めていたヴァイロンは一人の女性を見て思わず立ち上がった。

アステベート、捕まっていたのか。

警備の兵士に指示されるのを露骨に嫌がつて険しい顔で歩いている。過酷な環境も彼女を変えることは出来なかったようだ。

何かの偶然かアステベートがこちらを見上げた　そしてあつと口を開ける。

ヴァイロンは口元に人差し指をあてて静かにするように合図して、アステベートを黙らせると安心させるように頷いて見せた。

波打つような胸の音を聞きながら、落着かせるように吸つては吐くを繰り返す。知ってしまったものはどうしようもない。彼女がこのままでは死んでしまうのがわかつているのにみすみす放っておく事などできない。愛していたかどうかは関係ない。彼女はわたしの妻であることは事実なのだ。

ラドビアスにはアステベートの事を言わなくてはとドリゲルトの部屋に行くがそこにはイール將軍が居てラドビアスに近づくことができない。

仕方なく部屋を出ると虜囚の警備に就いている兵士に声をかける。「わたしは陛下のお側に仕える者だがサイトス国の姫がどの部屋にいるか、調べてくれ。陛下のお召しがある」

「畏まりました」

ルクサン皇国の正騎士の格好のため、疑うこともなく去つた兵士を見送つてヴァイロンは考えこんだ。

王の寢所に送ることにして連れ去った後はどうする。

ヴァイロンには頼る地縁も知り合いもこのサイトスにはいない。何としてもラドビアスに話して匿う所を手配してもらわなくてはならない。

暫くして先程の兵士が息を切らせて戻って来た。

「お待たせいたしました。あちらの小宮の三階、左端のお部屋でございます」

「うむ、ありがとう。下がってよい」

そのまま案内させようかと思ったが見たところ、身分は建物内に入れるほどではないようだ。連れて行って番兵に不信に思われてもいけない。

「右軍配属、第一騎士団大尉ゴーラである。陛下の命で参った、入城を許可せよ」

「お一人でございますか」

「ああ、用事はすぐ終わる。鍵をかしてくれ、今晚陛下のお側に上がることを伝えに行くだけだ」

「それならわたしが……」

「いや、わたしも陛下が執着される女を見てみたい」

そうまで上級将校に言われてしまえばもう何も言えるわけもなく、腰から鍵の束を外してヴァイロンに渡す。

鍵を受け取りながらこの事はすぐにこの兵士の上官に報告されるだろうかと考えていた。

常識では考えられないことだろう。自分でも苦しい言い分だとは思うが今は時間がないのだ。明日にはイーヴァルアイが術式を行ってしまう。

やっと部屋の鍵を見つけて扉を開けるとアステベートがはつとした顔の後に笑顔を浮かべた。

「ヴァイロン」

「アステベート、わたしは……」

ヴァイロンの言葉は抱きついたアステベートに驚いた為続かなか

った。

「ヴァイロン、わたしを助けに来てくれたの？　うれしい、ヴァイロン」

「アステベート？」

一体これはどういうことなのか。素直に感情を出すアステベートにヴァイロンは戸惑う。助けにきたからこそその反応なのか。これではまるでわたしに愛情でもあるような素振りではないか。「どんなに心細かったか。わたしはあなたに城を出て行くのを止めてもらいたかったのよ」

そう、だったのか？

「とにかく、今晚助けに行くからそれまで大人しくしていてくれ」足早に立ち去ろうとするヴァイロンの背中にアステベートが追いつめる。

「あなたを初めて見たときから好きだったの、本当よ。だからあの女とは別れてください」

あの　女？　一体誰のことを言っているのかヴァイロンにはわからない。

「亜麻色の髪で水色の瞳の……女よ」

イーヴァルアイ。

「行くよ」

なおも縋る手をそつと離してヴァイロンは部屋を出る。番兵に今晚また迎えに来ることを伝えてヴァイロンはラドビアスの所に急いだ。

サイトの主城の中を歩くヴァイロンは女達が集められていた西側の大広間に続く廊下に黒い影を見つけて後を追った。

「イーヴァルアイ、ここで何を」

名前を呼ばれた黒いローブ姿の人物が振り返った。

「用意だ、これ以上は何も言わない」

そのまま行こうとするのを手首を掴んで引き止める。

## 計算違い

「ラドビアスに頼みたいことがあるんだが二人きりになれない。おまえならラドビアスと呼べるだろう？」

「頼みとは何だ。わたしに言え」

「わたしの妻を　アステベートを助けたい」

「……やはり私に言っても仕方なかったな。もう行く」

イーヴァルアイは眉を顰めてヴァイロンの掴んだ手を振り払おうとするがヴァイロンに逆にもう一方の手も掴まれる。

「おまえ、アステベートが捕まっていたことをなぜわたしに言わなかったんだっ」

非難したくなんてないのに口から出てくるのはいつもそんな言葉だった　なぜなんだと。

「あの女のことなどわたしは知らないっ、おまえも好きにしたらいい」

ヴァイロンの腹を膝蹴りして逃れるとイーヴァルアイは冷たく言った。

「ラドビアスは呼んでやる、あとは知らん」

「　イーヴァルアイ」

「黙れ、ヴァイロン」

イーヴァルアイは印を組んでラドビアス、と呟いた。　そこへ開く竜門。

「お呼びですか」

ガウシスを纏ったラドビアスが姿を現す。

「ヴァイロンがおまえに頼みたいことがあるそうだ」

腹を押さえてしゃがみ込むヴァイロンに、冷たい一瞥をくれてイーヴァルアイは広間に歩いて行った。

「大丈夫ですか、ヴァイロン様」

「ああ、たいしたことじゃない」



「で、主と何をめぐつての齟齬そごがおりになったのです？」

うん……と気詰まりな表情でヴァイロンは暫く黙っていたが初めからラドビアスに頼むつもりであったのだ。

「虜囚の中にわたしの后妃がいるのだ。今晚のうちに逃がしたいんだが」

「そういう事でしたか」

ラドビアスはイーヴァルアイの消えた方に顔を向けて溜息をついた。

これで助けても助けなくてもヴァイロン様と主の間には確執が生まれるのだろつ。

「連れ出す算段は出来ておりますか」

「ドリゲルトの寢所に召し出されることにしたが」

「それはそれでよろしいでしょう。こちらからも今晚お召しがあることを正式に小宮の番兵長に命を出しておきます」

これを、とラドビアスは羊皮紙を懐から取り出した。

『我、望む所現し、ここに記せ』

羊皮紙に手をかざすと手の周りに黒い粒子が集まり羽虫のように蠢いていたが、次第に紙に絡め取られたように定着する。それはサイトスの城下町、それを囲む広大な森の地図だった。

「この道を半刻も行きますと獵師小屋があります。今は使われておりませんから暫くそこにお隠れください。明日の昼にはすべて終わっております。わたしが迎えにまいります」

「何で使われていないとわかる？」

地図を受け取りながら首を傾げてラドビアスを見ると、ラドビアスは言いにくそうに答えた。

「主が結界を張るところを見つける恐れのあるものをそのままにしておくとは考えられないからです」

つまりは結界を張る、城下町沿いの森の中は今は無人大というところか。獵に出ていた者も山の幸を採りに来ていた者も 誰もいない。

民にとって支配者が誰であろうと関係ない。それこそこの島は何十年も小さい争いを繰り返してきたのだ。畑は痩せ家畜は子どもを産まない。そして死んだ人間を補うために女を略奪していかれた国はますます疲弊<sup>ひへい</sup>していく。軍を養う民が豊かでない国の将来は暗い。

それでもしたたかな民は戦の間、森に潜み、戦が終われば獵をし、食べ物求めて森の中へ入る。

その者たちを殺したのか、イーヴァルアイ。

「竜門が使えればよろしいのですが后様はお通り願えませんでした」

「そうだったな」

「少々お待ちを」

竜門を開けて姿を消すとすぐにラドビアスは戻って来た。その手には頭からすっぽり覆うマントと食料の入っている袋、水の入っている皮の水筒があった。

「これを。すぐにお迎えに行けると思いますが念のためでございます。道は先程お持ちになった地図が教えます。では失礼いたします」  
暗い表情のヴァイロンを残し、開けっ放しにしていた竜門にラドビアスはするりと姿を消した。

夜を迎え、ヴァイロンは風防の付いた蠟燭台を片手に小宮を訪れる。ラドビアスのおかげでまたもや一人で訪れたヴァイロンを疑う事無く番兵は迎え入れる。

「アステベート、わたしだ」

「ヴァイロン」

頭からマントをかけてやるとその間合いから抱きついて見上げるアステベートにヴァイロンは口付けた。守ってやらなくては、これを取り越えたら二人は夫婦として上手くいくのではないか。ヴァイロンはアステベートの腕を取って部屋を出る。

途中から地図に導かれて兵士にも会わず、もう少しで森にどうかというところに低木の茂みががさがさと音を立てた。

「どこへ行く気だ、ゴーラの小僧」

「イール將軍」

あつという間にイールの手勢に囲まれてしまう。

「その女に恋着して逃がそうというのかな？ このことは陛下の御前で釈明してもらおう」

くそつ、一人なら何とかこの場を切り抜けることが出来るかもしれないがアステベートを連れて二人ではまず無理だ。

「ヴァイロン」

アステベートは口を塞がれ後ろ手に縛られるとかがつがれて運ばれて行く。ヴァイロンも後ろ手に縛られて剣を背中に突きつけられている。

「おまえの様子がおかしいので見張りを付けていて正解だったな。おまえのような若造はまだまだわしの下で小さくなっておればよいのだ」

イールは満足そうに笑った。

## 長いお別れ

その頃小宮の方でも動きがあった。女達がまた主城に集められることになり、行列を作らされている。

「皇帝陛下からおまえたちの処遇についてお言葉があるのだ、早くしろ」

イル將軍が連れ帰った女達も含めると今までの二倍近くになっている。いるせいで大広間といえど寛ぐことなど出来ない。

「こんな所に朝までいなくてはならないの？」

一人の女がぼつりともらしたがそれに明快な答えを返す者はいない。やがて緊張も解けて待ちくたびれた女達は床に座り込んでいく。日付も変わり、朝の薄い光が部屋に差し込む頃、一人の女が床に刃物のような物で傷をつけて描いてある模様に気が付く。

ずっと繋がっているのだわ。大きな円にどこのものかわからないが記号や文字が描き込まれて……これって『魔方陣』というのではないかしら。

ぱたりという密かな音がして黒いローブ姿のフードを深く被った者が入って来た。その手に持っている香炉からは嗅ぎ慣れない香りがする。急に入って来た得体の知れぬ者のためにざわついた中でその人物は何かを唱えている。

そして女達は自分の鼻から血が出ていることに気付き悲鳴を上げ始める。見渡す限りのどの女達の鼻から目からそして耳から血が流れている。

「だれか、助けて」

女達の叫ぶ声がだんだん途切れていき、それにつれて甘ったるい香の匂いと金気を含む生臭い匂いが部屋を満たしていく。

広間の中に響くのは呪文を唱える声だけになった。穏やかに流れるような調子で途切れることなく香の香りとともに広間の隅々まで通り包む。そして刻まれた魔方陣に血が流れ込んで赤く染まっ

た。

「始まったようですね」

ドリゲルトの居室にいたラドビアスはわずかに目を細めて竜門を開けて体を入れようとしてふと、廊下に響く足音に立ち止まった。

動ける人間がまだいたのか。

「ここを開けよ、イールでございます、陛下」

晩の内に薬を混ぜた振舞い酒のせいで起きている者はいないと思っていたが。

「陛下は体調を崩されてお休みですが」

仕方なく扉を開けると女を抱えた兵士と後ろ手に縛られたヴァイロンが押し出されるように部屋に入ってきた。

ヴァイロン様。

「城はどうなっているのだ、ガウシス。おまえ何か知っているのだろっ」

イールに剣を突きつけられたラドビアスは眉を微かに顰めた。

城が揺れている。このままでは術式に巻き込まれてしまう。ラドビアスは無言のうちにイールが突きつけた剣を手で素早く弾いて懐に入り込むと、いつの間にか手にしていた短剣でイールの喉を真横に深く切り裂いた。

「ヴァイロン様、仕方ありません。術式は始まってしまいました。

もう竜門を行くしかございません」

首から血を噴出して倒れるイールに啞然とする兵士の間を縫ってヴァイロンの元に行く。戒めを切ってアステバートを担いでいる兵士の足に短剣を投げる。

アステバートを担いだまま倒れる兵士からヴァイロンがアステバートを奪って抱き寄せると、剣にした『鍵』で目の前の兵士をなぎ払うように倒す。続いて後ろから斬りつけてきた兵士の腹に剣を後ろ手に振り向くことなく突き刺した。

ラドビアスは印を組むと呪を唱える。

『縛せよ』

残った兵士に呪を飛ばすとヴァイロンとアステベートに顔を向けた。

「なるべく竜道を急いで抜けましょう、ヴァイロン様背負っていただけです。竜道は后様のお体に障りますから」

「わかった」

アステベートを背負うとヴァイロンは竜道に飛び込む。

「閉じよ」

ラドビアスは前に行くヴァイロンをすり抜けて前に出る。

「できるだけお急ぎを」

急ぐヴァイロンは恐ろしい獣の叫び声を聞いた。竜道に何かいるのか？ 恐ろしさにますます足が速くなるが追いかけてくるように叫び声も続く。そしてそれが自分が背負っているアステベートの叫び声だということに気付いて思わず足を止める。

「だめです、ここを早く抜けなくては。死にますよっ」

ラドビアスの声につきたてられるようにヴァイロンは再び走りだす。

先に竜道から出たラドビアスが手を掴んで竜門からヴァイロンを引っ張り出してアステベートを降ろした。

獣のように唸るアステベートの手をゆっくりはがすようにおろしてやる。頭から体から湯気のように煙が上がって右側が真っ黒に焼けただれて細かくけいれんをおこしていた。

何てことだ。

「アステベート」

「薬がありますから」

「助けてくれ、ラドビアス」

「力は尽くしますが必ずとは申し上げられません。竜道は人外の道でございますから」

あまりの酷いアステベートの姿に茫然とヴァイロンはその場に崩

れるように座り込んだ。

元の姿に戻ったラドビアスは持ってきた清潔な敷布にアステベートを包みこむとそっと抱き上げて出て行った。

半刻ほどしてラドビアスが戻って来たのを待ち構えるようにヴァイロンがラドビアスの腕を掴む。

「アステベートはどうだ？」

「お命は助かるとは思われますが暫くは慎重に見ておりませんと」

「会えるのか」

「意識はございませんよ。と言うか、術をかけて意識を眠らせております。体力が戻るまでこのままにいたします。お会いするのはもう暫く後になさいます。今意識を目覚めさせると激痛でご本人がお困りになります」

「そうか、わかった」

ラドビアスの説明を聞いてほっとしている自分がいる。あの姿を正視できるのか自信がなかった。

もっと上手く出来なかったのか。何かほかに別のやり方があったのではないか。やり直せると思っていたのに。いや、彼女の命は助かったのだ。このまま見捨てることなど出来ない。このまま彼女をわたしの后妃として迎える。

「ヴァイロン様、サイトの様子を見てまいります」

「わたしも行く」

立ち上がるヴァイロンにラドビアスは口を開きかけて 止めた。

「ではこちらに」

大広間の扉を開けるとそこは一面赤一色の世界だった。その中央にうずくまっている赤黒い塊。むせ返る血の匂いと香の匂いで吐き気がする。

「イーヴァルアイ」

ヴァイロンの呼びかけにその塊が動いて顔を上げた。

「なんだ、今頃来たのか。おそいな」

「ご首尾は？」

ラドビアスの問いにイーヴァルアイはだるそうに応える。

「上々……」

ラドビアスは元は人間であつた数々の塊を軽々と越えてイーヴァルアイの元に行くと、だらりとうずくまるイーヴァルアイを抱き上げる。血を全身に浴びたロープから血が滴りラドビアスのロープにも染み込んでいく。

「イーヴァルアイ、アステベートが酷い怪我をした」

「それで？」

「おまえなら竜門を使う以外に何とでも出来たはずだと、思ったただけ」

「ヴァイロン……」

ヴァイロンの非難めいた言葉に、イーヴァルアイは何か言いかけてふつつりと黙りこんだ。そして、助けを求めるようにきつくラドビアスの首に両手を回してヴァイロンから視線を外す。

「術は完成した。おまえは今日からこの島国の、レイモンドールの王だ。わたしはおまえと交わした契約に従ってやるべきことをやる。あとのことはラドビアスが手伝う。何かあつたらラドビアスを通して連絡してくれ。廟に帰る」

「直ぐに戻ってまいりますのでヴァイロン様、失礼します」

『アルベルト、ルーファス、サイロス、解せよ、ゴートの廟へ通せ』

ヴァイロンにラドビアスは軽く頭を下げて竜門をくぐる。イーヴァルアイがこの時、どんな表情をしているのかはラドビアスの胸に顔をぴつたりと付けているため、ヴァイロンには見えなかった。



## 風が運ぶもの

その後、新しい国の王ヴァイロンは荒れた国内を立て直すため何十年も忙しい日々を過ごす。その側には背の高い頬のこけた男が宰相として付き従っていた。

ゆっくりとだが国土は豊かになって、それこそ寝る間も無く働いていたヴァイロンもやっと一息つく事ができるようになった。丸裸だった国土の緑も日を追って濃くなり、サイトスの城下に広がる市街地の賑わいもまた、今日は昨日の倍といった具合でこの国は良い方へと転がっている。そう、誰もがやっと確信し始めたこの頃。しかし、懸念が無いわけではない。その一つは、王には跡継ぎとなる子どもが今だにいないことだ。それというのも彼の后妃は子どもを生める体ではなかったからだ。しかも妾妃を持つことを彼女が嫌がるからでそれをヴァイロンも無理強いしないためであった。

ある日の午前中、ラドビアスの元に二人の魔道師が姿を現した。まだ十歳くらいのこどもだった。首からは竜印を模った銀製の呪を封じたペンダントを下げている。このペンダントのおかげで竜道を通れたものであるらしい。

「ラドビアス様、主がお呼びでございますよ」

「早く呼んで来いって仰って、かんかんですよ」

先に声をあげた茶色の髪のリ発そうな子どもがきつ、と横の灰色の髪の子どもを睨みつける。

「ルーク、主のことをそんなふうに言うのは止めるんだ」

「はい、でもラドビアス様、とつとおいでになったほうがいいですよ」

何か主の機嫌を損なうことがあったらどうかとラドビアスは執務室

の椅子から立ち上がった。そこへヴァイロンが入って来る。

「陛下、主が呼んでおりますので少しの間、廟へ戻ってきててもよろしいですか」

「ああ、その者たちは？」

「お初にお目にかかります。ゴートの廟で主にお仕えすることになりました、ガリオールと申します」

「ルークと申します、陛下。主の身の周りのお世話をしております」  
幼いながらに慇懃<sup>いんぎん</sup>な挨拶をして、ぺこりと頭を下げる子どもが微笑ましく思えてヴァイロンは二人を手招いた。

「お前たち、甘い物は好きか」

きょんとする二人の子ども手のひらに焼き菓子をのつけてやると目をまるくした。

「わつわたしは、主のお使いで来たのでこんな……」

今まで口にしたことがない菓子を目の前にして断らなくてはと口をぱくぱくしているガリオール。その横で軽快なバリバリという音を立ててルークが菓子を飲み込んで手をぺろりと舐めた。

「これで証拠は残りません、陛下のご厚意ですからね。無下にはできませんから仕方なく頂いたのですよ、陛下」

「ルーク、何を言って……」

絶句するガリオールにヴァイロンは優しく言った。

「そうだ、わたしが無理強いするのだからそれを残さずに食べるのだぞ」

ガリオールが食べ終わるのを待ってラドビアスは竜門を開けた。

「では陛下行ってまいります」

子どもたちがラドビアスと消えてヴァイロンはもう何年も会っていない魔道師の姿を思った。隣のあいた机をぼんやりと眺めていたヴァイロンは官吏の声にはっとする。

「陛下、朝議が始まります。おいで下さい」

あの混乱の時代は過ぎ、国境に張り巡らされた結界によって大陸からの侵略の心配もなくなり、あれほど荒廃していた国土も緩やか

に復興してきているのを感じている。それとともにヴァイロンは以前国として分かれていた地所を州として新しく任じた州候からの陳情、州同士の揉め事やら国府内の人事上の駆け引き等、文書に追われる身になった。

そしてそれを疎ましく思っている自分も見つける。

しかし国が大きくなるということはそういうことなのかもしれない。誰かがそういう雑事を引き受けなくてはならないのだろう。

そう、思えるほどくらいには自分も歳を取ったということか。

溜息をつくヴァイロンはだが外見は『鍵』と契約したところと同じ二十一歳のままだった。

あいつは変わったろうか。

あの喧嘩別れのような時からイーヴアルアイとは会っていなかった。去年、三年がかりで建て直されたサイトスの主城のお祝いに他の廟からは魔道師がお祝いに訪れたが彼は来なかった。それならば自分から会いに行けば良さそうなものだがヴァイロンは何だかわだかまって素直になれない。そんな事をしているうちに長い長い時間が過ぎて行ったのだ。

その朝、后妃の居室でアステベートは先程から急に風が強く吹き込んでくるようになり、頭から被ったレースの布が顔にあたるのをいまいましく払いのけた。噛み付くように侍女に窓を閉めるようにいつける。

「窓を閉めなさい。風は嫌いよ、嫌なものを運んでくるかもしれない」

そう言った目の前に黒いローブ姿が現れた。

「嫌なもの？ それはお互い様だろう、后妃様」

「おまえは」

目の前に立っているのは忘れもしないあの時の女だった。

「今日はおまえにちよつと忠告をしに来たんだが」

あのときの　そう思ったがそんなはずはないとアステベートは自分の記憶を否定する。あれからもう、三十年近く経っているはずなのだ。それに今自分の前にいるのは魔道師姿のおそらく男だろう。女性は魔道師にはなれないのだから。

「おまえ、ヴァイロンが妾妃を持つことに反対しているんだって？ おかげでヴァイロンは今まで一人の子どももない。これは一国の后妃の態度にしては常軌を逸しているのではないか」

あくまでも笑いを浮かべたまま魔道師はぐいとアステベートに顔を近づけた。

「わたしはヴァイロンを愛しているのよ、他の女に心を移されるなんて我慢なら無いわ」

「おまえは、だろ。ヴァイロンがおまえに抱いている思いが愛情だと思っっているのか、アステベート。そりゃ図々しいな」

そう言うアステベートの頭からレースの布を奪い取ると印を組んで呪を唱える。すると窓のガラスが全身を映す鏡になった。

「や、やめて、お願い」

顔を覆うように手を挙げるアステベートの両手を背後から掴んで拘束すると肩から顔を出して鏡を見る。

「ほら、ごらん、醜い顔だ。体も同じだろう。その体にヴァイロンは触れたことがあるのか。あいつが持っているのはおまえに対しての贖罪しよぐわいの気持ちと憐憫れんぴんだ。とくに気付いているはずだ。おまえはその醜い顔であいつを死ぬまで脅迫する気なのか。まあ、おまえに子どもが作れるのなら仕方ないと思っただがいくらなんでも時間切れだ、アステベート」

「やめて…これを見せないで」

「いや、しっかり見るんだな。人には寿命があるんだよ、アステベート。王の子どもが出来ない場合、このレイモンドールは滅びることになる。それでいいのか、自分を哀れむ穴にいつまでも隠れていないで后妃の役目を果たせ。よく考えることだ、自分で穴から出てこれないのならわたしの手伝ってやる。死をもってね」

言うだけ言うと魔道師は術を解いて消えた。長い時間だと思っ  
たのに侍女の声に驚く。

「アステベート様、今窓を閉めますから」

ぎくりと窓を見ると強い風が吹き込んでいた。

「また、名乗らなかつた」

廟に帰ったものの肝心のイーヴアルアイがないのにラドビアス  
は首を傾げるが、仕方なく廟内の主の机などをルークに手伝わせて  
片付けていると竜門が開いた。

「どちらに行っておいでだったのです？」

「どこでもいいだろ、おまえに言う必要など無い」

「お呼びくださったとばかり思っておりましたが違いましたか」

イーヴアルアイはラドビアスの強い抗議にぶいと視線を外すと椅  
子に乱暴に座る。

「ラドビアス、お茶入れてくれ」

「わたしが入れましょうか？」

茶器に手をだしたルークの手をラドビアスがそつと押さえた。

「いいえ、久しぶりですからわたしが用意します」

茶器にお茶を注ぎ入れながらラドビアスはイーヴアルアイの正面  
に立つ。

「わたしがサイトにいたら何か不都合なことがあったのですね」

「さあな」

「やはりサイトにいらつしやっていたんですね。一体何ですか？」

「うるさい、おまえらがあのババアを何とかしないのが悪い」

アステベート様のところですか。ラドビアスが小さくため  
息をつく。

「このまま、あのババアがヴァイロンより長生きでもしてみろ、取  
り返しがつかない。何でもいいからババアを黙らしてあの自虐男に  
若い女をあてがってやれ、ラドビアス」

「何がおかしい」

横を向いてくすりと笑うラドビアスを見咎めてイーヴァルアイが鋭く言う。

「いえ、ヴァイロン様がいつまでもアステベート様への罪に苦しんでおられるのがご心配なのかと思ひまして」

「わたしは契約のことを言っているんだっ。おまえたちが何とかしないと本当にわたしがババアを殺しに行くからな。話はそれだけだ、サイトスへ帰れ」

話を蒸し返されるのを嫌うようにイーヴァルアイは話を切り上げようとする。それに対してラドビアスはイーヴァルアイの真向かいに座った。

「もう少し、待ってみましょう、イーヴァルアイ様。この件は確かにわたしが責任を持って処理しますから。ところでアステベート様をどうやって脅かしたんです？」

## 穏やかな幸せ

それから六年後、アステベートは亡くなった。ヴァイロンにはすぐに妃を迎えるように遺言を残して。

喪が明けると周りは直ぐにも結婚を勧めたがヴァイロンはなかなか決心がつかないでいた。アステベートが亡くなる暫く前からあれ程嫌がっていた妾妃を持つことを勧めるようになりヴァイロンは面食らっていたが結局持たないできたのだ。しかし、国务大臣以下大臣級の官吏が毎日のように泣き落としにかかるのに根負けして仕方なく山ほどある書簡を見ることにしたのだが。

「ラドビアス、どれにしたらいいのか、書類見ただけじゃあわからないよ」

「一緒に姿絵も入っていると思いますが」

「それはあてになるのか」

「なりませんね」

大きく溜息をついて椅子にふんぞり返ったヴァイロンにラドビアスが書簡を一つ渡す。

「これは？」

「南のザーリア州の姫です。わたしは良い縁組だと思いますよ」

自信たつぷりに言うラドビアスにヴァイロンは書簡を開いた。

次の年、正式にザーリア州に使者が送られ結婚が決まった。但し、結婚式は来春になる。レイモンドールはこれから厳しい季節を迎えるため、慶事は控えられるのだ。

そして春の訪れとともに国中が喜びに沸いた。美しい王と可憐な王妃の結婚式は復興目覚しい国の更なる喜びの象徴として国民か

らも祝福されたのである。

政略結婚という味気ない名前からは想像できないほどヴァイロンは穏やかな幸せを感じていた。結婚とはいいいものなのだということを新しい妃は初めて教えてくれた。

「陛下、今日はとてもいい知らせをお持ちしましたのよ」

そう言ってふわりとヴァイロンの腕にとびこんで来る。

「楽しみだな、ルシード」

ふふふと笑って見上げる赤毛の妃は花のようだった。南国の暖かい空気まで連れてきたような娘だなとヴァイロンは笑った。

「陛下のお子がお腹に宿ったのですって。先ほど医者に見てもらいましたの」

「本当に？」

「はい、陛下」

ヴァイロンは自分が親になるのがこんなに嬉しいものだとして初めて知った。その日は政務のことなど何も頭に入らなかった。

それから半年ほど経った頃。

「まだ生まれるには月日があるのに、こんなにお腹が大きくなって動くのもままならないわ」

大きなお腹をさすりながらふーっと大きな息をついて長椅子に座ってルシードはヴァイロンを見上げる。ヴァイロンは、執務の手を休めると妃の隣に座り、お腹にそうつと手を置いた。

「あまり歩きまわってはだめだよ。皆が心配しておまえの後をそろそろ歩いているそうじゃないか」

それを聞いてころろとルシードは笑った。

「わたしは大丈夫ですわ、陛下まで後をついてこられそうなお顔をしていますよ」

「そうしたいな、王が妃のあとをうろろついて歩くななんて噂がたないように大人しくしていてくれ」



長いレイモンドールの冬が開けたころ、ヴァイロンは落ち着きなく部屋を歩きまわっていた。

「陛下、落ち着いてください」

「こんなに時間がかかるものなのか」

「さあ、わたしは産んだことがないのでわかりません」

書類の山から頭を上げたラドビアスがしれつと言うとまた書類の山に戻る。裁可する書類はルシーダ妃の陣痛が始まってからラドビアス一人に任せている。何にせよ、ヴァイロンが座っていたとしても仕事はかどるわけではない。

それから執務室の中を何周しただろうか、待ちきれなくなつてのぞきに行こうかとヴァイロンが思つて足を止めたところに女官長が執務室に走りこんで来た。

「陛下、親王殿下ご誕生でございます」

「生まれたか、それでルシーダは？」

「はい、お疲れになつておられますがお元気ですよ」

女官長の言葉の最後はヴァイロンの耳には入っていなかった。

ヴァイロンが産室に向かつて走り出て行つたからだ。

ところが産室に入ろうとすると女官に止められる。

「陛下、恐れながらルシーダ様の陣痛が続いております」

「何？」

「もうお一人、おられるご様子でございます」

女官の言葉に応じるかのように産声が産室に響いてその後に産室の扉が開けられる。

「陛下、どうぞこちらに」

ヴァイロンがルシーダの傍らによると疲れは見えるが晴れ晴れとした顔のルシーダがヴァイロンを見上げた。

「よく頑張ってくれたな、王子を二人も産んでくれてわたしも皆もうれしい」

隣の寝台に寝かされた赤い母親譲りの髪の元気のいい子どもたちを見てヴァイロンの顔が綻はらんだ。

次の晩秋の頃、双子たちがやっと覚えたよちよち歩きを王の部屋で披露していた時、竜門が開いた。廟に帰っていたラドビアスが戻ったのだらうと気にも留めなかったヴァイロンに中からラドビアスが現れて告げる。

「主をお連れしました」

続いて姿を現したのは自分が変わらないのと同じ、四十年前と変わらぬ姿の魔道師。

「イーヴァルアイ」

「久しいな、ヴァイロン」

イーヴァルアイは淡々と言うとよたよたと歩く双子を見つめる。

「で、どちらをわたしに渡すのだ」

いきなり虚をつかれてヴァイロンは言葉を失う。

## 喪失

「約束だったはずだ。おまえが選べないのならわたしが決めるが」  
「陛下、どういう事です？ この者は誰？」

ルシードが子どもを両腕に抱えてうずくまる。彼女はイーヴァルアイの存在を知らないのだ。

わたしは何という馬鹿な約束を交わしたのだろう。どちらを連れていかれても自分の体の一部をもがれるほうがましだというのに。

「わたしには選べない、どちらも渡せない」

ヴァイロンはイーヴァルアイに対峙するように子どもとルシードを背中にして『鍵』を剣に変える。

「契約を反故にするつもりか、ヴァイロン。前にも言ったがわたしは親切でおまえをレイモンドールの王にしたのではない」

厳しい声の後に続く深い溜息。

「なら、いいことを教えてやる。その剣でわたしを斬れ、ヴァイロン。『鍵』の主はそれを使うことによって契約を無に返すことが出来る」

「おまえを 斬る？」

「そうだ、ヴァイロン。わたしを討て、それで終わりだ」

「御止めください、陛下、それだけは」

ラドビアスが悲痛な声を上げた。

イーヴァルアイを殺せば契約は終わる。

無防備に両手を垂らしてヴァイロンの前に立つイーヴァルアイにヴァイロンは剣を振りかざす。これで終わりにする。が、剣はがくりと下ろされて指輪に戻されてヴァイロンの手に収まった。  
「出来るわけではない」

この四十年あまり、レイモンドールはやつと潤い始めたばかりなのだ。これを無に返すことなど出来ない。わたしにはレイモンドールの国土と国民を守る使命があるのだ。知らぬ内にわたしはなんと大きい質を取られていたことか。

「ではわたしが選んでいいんだな」

イーヴァルアイが感情の読めない平坦な声で告げると子どもの側による。ヴァイロンは嫌がるルシーダをただ抱きしめる他なかった。

「すまない、ルシーダ。この魔道師と古い約束を交わしてわたしはこの国の王になったのだ。おまえが生まれるずっと前に……すまない」

泣き崩れるルシーダを抱きしめながら自分もこのまま壊れそうだとヴァイロンは思った。

「わたしを 殺さないんだな、ヴァイロン」

イーヴァルアイが左側の子どもを指差すとラドビアスがその子どもを抱き上げる。次いで、子どもの首にペンダントをかけると自分のローブでくるむようにする。

「これで満足かイーヴァルアイ」

ヴァイロンがイーヴァルアイを睨むように見上げる。

「そうだな」

イーヴァルアイは小さく答えた。

「もう、行け。おまえの顔はもう二度と見たくない」

ヴァイロンは胸が潰れる思いでイーヴァルアイに別れを告げた。もう何をしても相容れない二人はどんどん離れていくしかない。

「わかった」

聞こえないくらい、小さな声。

「陛下、わたしも暫くお暇をいただきます。わたしの後任にはガリオールという者をお付けいたしますので」

ラドビアスが幼い子どもを抱いたまま頭を下げる。

「行くのか、おまえも」

ヴァイロンにうなづいてラドビアスとイーヴァルアイは竜門に消えた。この四十年間、長く一緒に苦楽をともした魔道師。しかし、魔術以外のあらゆることに通じているこの男がヴァイロンにとつてどんなに大きな存在だったか。いやそれだけでなくヴァイロンにとつてかけがえのない友だと思っていた。

最愛の息子との別れ、ラドビアスの離反、それにイーヴァルアイとの決別。イーヴァルアイに抱いている思いは一言では言えないくらい複雑で。ヴァイロンにさえ解からない。愛しくて憎い、守ってやりたい気持ちもあったはず。だが今は全部考えたくない。大きな喪失感をいだきながらいつまでもヴァイロンは竜門の消えた場所を見ていた。

あくる朝、ヴァイロンが執務室に入ると宰相の席に見知らぬ男が座っていた。灰青色のローブを着て、歳の頃は二十代初めくらいか。血色のいい顔に愛想のいい笑みを浮かべている、茶色の髪、茶色の瞳の男。

「おまえがラドビアスの後任に就いたガリオールか」

「はい、宰相と王宮付きの魔道師長としてお仕えいたします。よろしく願います」

「魔道師としての任もだが宰相の仕事もしっかりやってくれ」

立ち上がり、深く頭を垂れる男につい、厳しく言ってしまうのはラドビアスへの感傷だろうか。ラドビアスは宰相の間、ローブを着たことがなかった。宰相としての仕事を優先していたからか、今になってはわからないが。

「はい、重々肝に命じまして」

にこりとする男に、あつとヴァイロンは記憶をさぐる。

「おまえ、前に会っていないか」

「はい、十年ほど前にお会いしております、陛下。お菓子を頂きました」

そうだ、ラドビアスを呼びに来た二人の子ども。あれから十年もたったのか。

「もう、一人いたな」

「はいこの度、主にわたしとルークは竜印を授けて頂き、わたしはサイトスへ。ルークはラドビアス様がお戻りになったので主のお世話からゴートの廟を束ねる廟長となりました」

「今、竜印を持っているのは何人いるのだ？」

「三人ですね」

「それだけか、もつといるかと思っていたが」

レイモンドールにいる魔道師の人数からいって、もつと竜印を持つものが増えたと思っていたヴァイロンは首を傾げてガリオールを見た。

「十年前に各廟から選抜された者を主が教育なされたのですが残ったのがわたしとルークだけでしたので」

「当初は何人いたのだ？」

「そうですね 二百人近くでしたか」

一体、どんな教育だったんだ。二百人の内から残ったのが二人だと言うのなら、にこりと笑うこの男も相当な術師ということか。

ガリオールが着任して大きく変わった事といえば、サイトスの城内に魔道師庁というものが出来て何百人もの魔道師たちが官吏に混じって出仕するようになった。

初めこそローブ姿の男たちが城内を歩き回るのに他の軍人や貴族が動揺していたが二年、三年と過ぎる内にそれも普通のこととなっていく。

ガリオールは規律をつくり、魔道師たちを厳しく監理する一方、巧みにサイトスの政庁内に魔道師を組みこんでいく。魔道師にとつてはある意味ラドビアスより能吏であるとも言えた。

さらに二十年の歳月が過ぎた、短い夏の終わり　ヴァイロンは自分がいつもと違うことに気付いてひやりとしたものを感じた。が、その異変はすぐに収まり、彼は何事もないように振舞ったため誰にも感づかれることは無かった。

しかし、その異変は間隔を狭めていきながら度々おこるようになり、ついにヴァイロンは秋が深まったころ、ガリオールに告げた。

## 忍び寄る老い

「陛下、何の御用でしょうか」

いつものように笑顔をうかべてガリオールが部屋に入って来た。

「すまないがラドビアスを呼んでくれ」

「どんな御用か、お教え願えませんか」

ガリオールの笑顔が曇って強い調子になる。

「ラドビアスに直接言う」

ヴァイロンはガリオールの小さい抗議にはまったく構わず、そっけなく言った。いつもは誰に対しても王としては気を使いすぎなぐらい気を使うヴァイロンの態度に、不穏な気持ちを抱いたがガリオールは仕方なく頭を下げる。

「御意のままに」

半刻ほど後、執務室から居室に戻ったヴァイロンの元へラドビアスが一人で竜門から姿を現した。

「陛下、お久振りでございます。何か ありましたか」

うなずいてヴァイロンは寝台の横にある机を指差す。机の上には細長く畳まれた絹の布が置いてあり、その布の上にあるのは……。

「陛下」

ラドビアスはフードが後ろに落ちるのも構わず、机へと走り、机の前でぴたりと足を止めると顔だけヴァイロンに向けた。

「元に戻らないのですか」

確認するようにヴァイロンを見るとヴァイロンはうなずきを返した。ラドビアスの喉がごくりと鳴る。

「少し前から時々姿を勝手に変えていたが今日はいくらかわたくしが命じても指輪には戻らず、剣のままだ。ラドビアス、これはどういうことだ？」

尋ねているようで実はもうその答えを知っているのだとラドビアスはわかっていた。



「主を　お連れします」

逃げるようにラドビアスは竜門に消え、ものの数ザンとかからぬ内に再び竜門が開く。

「早いな」

ヴァイロンは苦笑いを浮かべる。

「ヴァイロン、本当に『鍵』が勝手に変化したのか」

挨拶も無く、いきなり確かめるように聞いてくるイーヴァルアイにヴァイロンはうなずいて笑った　ああ、まるで変わらない姿。

亜麻色の髪、水色の瞳、そしてこの声。

「何か悪い兆候なのだろう、イーヴァルアイ。それよりおまえ顔色が悪いぞ、風邪でもひいたのか」

「ちゃんと、命じたのか」

「イーヴァルアイ」

「やってみろ、わたしの目の前で、早くやれ、ヴァイロン」

まるで噛み合っていない会話にヴァイロンはイーヴァルアイの肩を持って引き寄せる。

「おいっ、イーヴァルアイ、しつかりしろ」

その声にやっとヴァイロンの瞳に焦点を合わせたイーヴァルアイの瞳が合った途端に逸らされる。

「わたしの死期が近いのではないか」

自分でも以外なほど冷静でいるヴァイロンが逸らされたイーヴァルアイの顔を両手で包み込むようにして自分に向かせる。

「　そう、なんだな」

イーヴァルアイは観念したようにこくりとうなずく。

「わたしには、あとのくらい時間が残されている？」

「二、三年というところだ」

消え入るような細い声。

「そうか、今日、明日ということではないのなら心の準備もできる。本当にその時が近づいたらどうなる？」

「『鍵』は剣から元の鍵の形に変わります。そして新たな王が命じ

るまで変化しません。『鍵』が元の姿に戻る時、陛下はご逝去されます」

答えないイーヴァルアイに変わってラドビアスが早口で答える。

「そうか。自分の体がいつまでも若いせいで歳のことを考えてなかったがわたしも今年で確か八十一になる。いつ死んでもおかしくない歳だったな」

言ってから目の前のイーヴァルアイをしっかりと抱いた。

「おまえには無理ばかりさせたな、自分が背負うべき罪をおまえに全部負わせていたのを気付いていたのにわたしは逃げていた。自分の闇に目を向けたくないばかりに。許せ、イーヴァルアイ」

「ヴァイロン」

言いかけるイーヴァルアイをヴァイロンは止める。

「少し、もう少しだけわたしの話を黙って聞いてくれないか。とても言いにくいことを言うのだから。わたしは初めておまえに会ったときからおまえのことを愛していたのかもしれない。>だけど、おまえは男で。だからそこからもわたしは逃げ出してしまった。遅くなったが 許してくれるか」

「謝るなんてやめろ、ヴァイロン。罪が深いのはわたしの方なのだから。おまえの国が、この島中の国がドリゲルトに蹂躪せんりゅうされたのはわたしのせいだ。わたしがそう仕向けた。自分の身を守るために…この島に強力な結界を張るために」

イーヴァルアイは大声で一氣に言うつとヴァイロンから逃れるように身をよじる。

「はっ、驚いたかヴァイロン。だからおまえがわたしに悪いなんて思う必要は何もないんだ、わたしは妖だからな。もともと残虐でずるがしこくておまえを手玉にとって陰で笑っていたんだ。それに…」

「もう、やめろ」

ヴァイロンはイーヴァルアイを抱く手をわずかに強めた。

「もついいから、おまえは妖なんかじゃない。だから泣くな、泣く

のなら声をあげて泣け」

「うるさい、泣くわけがあるか。おまえが何と言おうとわたしは妖なんだ。人間なんてあつという間に死んでしまっ、そう思ったただ」

ヴァイロンの腕の中でイーヴァルアイは声をあげて泣いた。

「生きている間に度々会いにきてくれ」

「わからない」

「イーヴァルアイ、会いに来い」

「ラドビアスを暫くサイトスに戻す」

竜門をくぐるイーヴァルアイの後をラドビアスが追った。

「いいのですか、陛下に言わなくて」

「何をだ」

「わかっていらっしゃるでしょう？ あなた様のお体のことです。ヴァイロン様はあなたを男だと思っていらっしゃるんですよ。それで宜しいんですか、本当のことをおっしゃらなくていいんですか」

狭い竜道の中にイーヴァルアイがラドビアスの頬に放った平手の音が反響する。

「二度とそんな事を言うなよ、わたしは 男だ。ヴァイロンは正しい。おまえはついてくるな、サイトスに残すと言ったはずだ」

「イーヴァルアイ様」

「くどいつ、これでいいと言っているんだ。話は終わりだ」

「わかりました」

ラドビアスは来た竜道を引き返していく。言葉に出していることと心の内は真反対なのだとわかっていても主に逆らうことは出来ない。

主は自分の気持ちに蓋をしても女性になるのが嫌なのだ、と

いうより怖いのか。　バサラ様から受けた仕打ちのせいなのか。  
主の体がどちらの性にもなり得ることをヴァイロン様が知ったらど  
う事が動くのだろう。　それが良い方へ行くのか、悪い方へ転がる  
のか……。　そして、自分はそれを望んでいるのだろうか。　ラド  
ビアスは深く長い溜息をついた。

## ザーリア州へ

「おまえが戻って来てくれてうれしいよ、ラドビアス」

「ありがとうございます。ですが今はガリオールが宰相を務めております。わたしは何をいたしましょう」

「そうだな」

ヴァイロンは暫く考えこんでいたがにこりと口元を緩めてラドビアスを悪戯っぽく見た。

「国内の様子を身に行きたいな。竜道を使えば移動も楽だし、剣を携えていればわたしでもまだ竜道は通れるのだろう？」

そうですね、とラドビアスも笑い顔になる。

「ではガリオールにしっかり宰相の仕事をがんばってもらおう」

ヴァイロンの言葉に二人は声を出して笑った。

揃って執務室に入ってきた二人にガリオールの眉が上がる。

「お揃いで何でしょうか」

「陛下とわたしは国内を視察することにしたので、引き継ぐことがあれば早急においてくれ。王の裁可があるものはまとめて竜門を通して届けなさい。陛下は明日にでもと仰られておられるが、それは無理だと思うから明後日にして頂いた」

「明後日ですと？」

ガリオールは絶句してつかの間立ち尽くしたがすぐに立ち直りラドビアスに猛然と抗議をする。

「そのような事をわたしに黙って計画されても承認できかねます。

陛下のご予定はこの先ずっと決まっております」

「別におまえに相談しているのでは無い、ガリオール。予定は変更しなさい」

自分には向けられたことの無い冷たいラドビアスの言い方にヴァイロンはラドビアスの別の一面を見たような気がした。

「何を勝手なっ」

「陛下がお決めになられた事に反駁するとは偉くなつたものだな、ガリオール」

ラドビアスの言葉にガリオールは肩をびくりとさせて口を閉じる。「ガリオール、おまえがいるからわたしは安心して我俣が言えるのだ。そんなに長くはかからないから 頼む」

「 畏まりました。ではその用意にかかりますので今日は魔道師庁に下からさせていただきます。陛下、失礼いたします」

頭を下げてそれだけ言うとかリオールはそそくさと退室して行った。

「おまえ、案外人が悪いな、もう少し言い方があるだろうに」

ヴァイロンがやれやれとラドビアスを見やるとそうですか、とラドビアスはにやりと笑った。

旅立ちの朝までの時間、ヴァイロンは后妃ルシーダを宿めるのに費やされていた。

「この歳になつて自分の国が今、どうなっているか見てみたくなつたのだ。竜門があるから何かあれば直ぐ帰れるし、顔も見にちよくちよく帰って来るよ」

ルシーダのこのところふつくらとしてきた手を包むように持つてヴァイロンは優しく言う。

「お約束ですよ、陛下。本当に度々お帰り下さいましね」

ルシーダはそう言うともた涙を落とす。ルシーダは三十台も後半になり、夫であるヴァイロンの見かけの年齢を追い越していくことに寂しさと心が離れてしまったらという不安を感じている。

ヴァイロンは妾妃を持つこともなくルシーダを愛しんでいたのだが、ルシーダにしてみればいつまでも若く美しい夫に不安を覚えるのだ。

それに、陛下がわたしに寄せてくださる感情は何なのか？

愛、ではあるのだと思うがそれが男女のそれなのか、ヴァイロン以外を知らないルシードにはわからない。だが、自分が抱いているものとは違うのではないか。ずっとそう思っていた。だから不安なのだ。

他に誰かいるのかしら。それとも最初の妃であるアステベート様のことを忘れられないのか。

「母上、それでは父上はここから出発できないではありませんか。すぐにお帰りになると仰っているのだから、気持ち良く出発出来るように笑顔でお送りしましょう」

赤毛のくせのある髪の母親にそっくりな明るい顔の王子、リチャードがそつとヴァイロンから母親を離す。今年、二十歳になり少し厳しさが足りないと口さが無い者が言うが、なかなか王を継ぐ器量はあるのではないかとヴァイロンは思っている。

国の創成期には物足りないかもしれないが、基板がしっかりして来た今なら大丈夫なのではないか。ガリオールがその辺はうまく補佐するだろう。

不思議なものだ。リチャードが成人するのを待っていたように自分の死期が近づく。ルシードとの間に子どもが出来なかつたら一体どうなっていたろう。これが契約した、ということなのか。あの六十年前、自分の体はすでに自分の物では無くなっていたのかもしれない。

「よろしいですか」

「では、行ってくる」

「お体を大事になさって一刻も早いお帰りをお待ちしております」  
后妃の言葉にヴァイロンとリチャードは顔を見合わせて笑う。

「父上、行つてらっしゃい」

「わたしの留守を頼むよ」

挨拶を交わす父子は見かけではどちらが親なのかもわからない、

同年の友人のようだ。

「ガリオール、迷惑をかけるが政務をよろしく頼む。いい機会だからリチャードにも手伝わせて勉強させてくれ、頼みにしている」

「お任せください、万事心得ております」

ガリオールはいつもの笑顔を見せて言った。

『アルベルト、ルーファス、サイロス、解せよ』

ラドビアスが印を組んで呪文を唱える。

「どちらになさいます？ 冬が来る前に北に行きますか」

「いや、南にしよう、ルシーダの郷里のザーリア州を見てみたいな」

「ザーリア州、ですか」

歯切れの悪いラドビアスにヴァイロンは何かあるのかと顔を伺うが、ラドビアスは顔を見せないように竜門に向かって言を続けた。

『ザーリア州、州都ギリアン近郊へ解せ』

竜道に足を踏み入れてヴァイロンはここでも時の流れを感じる。

地面は石畳になり、薄暗い中にも壁に何の明かりなのか等間隔でぼうつと光って足元を照らしている。

「立派になってるんだな」

「はい、サイトスから主要な場所へは頻繁に通りますので道が固定され、竜印の無い者も主が呪を封じ込んだ竜印を模ったペンダントを首から提げていれば通ることが出来るようになっております」

実際の距離と竜道の距離は関係ない。 知ってはいてもいくらも行かないうちにラドビアスが立ち止まり、着きましたよと言うのを聞くと釈然としない。



## ザーリア州の宿

「もう、着いたのか」

「はい」

竜門から外に出ると冷涼なレイモンドール国の南端、ザーリア州は首都サイトスと比べて格段に温かい風が吹いている。半島のように突き出ているこの州の海岸線を暖流が掠めていくためにレイモンドールにあつて例外的に一年を通して温かい気候になっている。

「暖かいな、夏のようなな」

「さようですね」

太陽までも南と北では見せる姿が違うのかと思う。空気の色も花の色も暖かい色をまとうている。遠目に見えるやや雑然と建つ、家々は厳しい冬の備えなど考えたこともないのだろうという開放的な造りだった。

「サイトスやモンド州とは大違いだな」

「こちらでは冬のうちに雪が降るのは数年に一回ほどらしいですよ。年に二回麦が収穫できるように聞いております」

ラドビアスの言葉にヴァイロンは驚いて目の前の風景を眺める。

自分は自分の国のことを驚くほど何も知らない。地域によってこんなに暮らしやすさに差があるとは。画一的な施策では不公平が生まれていくだけだ。一般的なレイモンドールの冬の備えなどこの州はまるで関係ない。税の徴収を年二回に分けて、冬場の税率を抑えているのはレイモンドールの冬は厳しく生産活動が停滞するからなのだが。その政策はこの州には恵みを与えているだけになる。

これから他の地域でも冬の間に営める産業を育てていかななくてはならない。

「この先、わたしは行く先々で考えさせられるのだろうな。でも来て良かったよ」

真面目な王の言葉にラドビアスれいめいきは黎明期の王がヴァイロンで良かったのだと心から思った。

「どうしますか、州城に寄りますか」

「いや、大げさにしたくないし、今回の旅は気楽にしていたい。州候に会うのも今回は止めておこう。この城下で宿をとろう」

「そう仰られるかなと思ひまして用意をしております。人目も無いことですし、さっさと着替えましょう」

ラドビアスが抱えてきた荷物を広げると二人分の衣類が入っていた。遠い昔、同じような事をしたことがあったなとヴァイロンはしみじみと思いながら着替える。

襟元を大きく開けた綿のシャツ、麻の丈の長い上着を羽織りゆつたりとしたズボンにサンダルのような靴を履く。横のラドビアスは逆に襟の詰まった立ち襟の長めの上着を着ていた。しかし、これも南国風というのか幅をたっぷりとしたズボンを履いている。

ラドビアスは脱いだ服を几帳面に畳んで荷物をまとめるとヴァイロンに顔を向けた。

「その剣をそのままお腰にさしてらっしゃると商人では通りませんね、鞘を変えますのでお貸し願えますか」

「どうする？」

ヴァイロンの問いに笑顔を返しながらヴァイロンから受け取った剣を受け取ってラドビアスは印を結ぶ。

『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』

言いながら鞘を先からなぞっていくと鞘は姿を変えて杖になる。

巧みに形作られているその中に剣があるとは思えない出来だった。「ご不自由をおかけしますが、どちらかの足を悪くしていることにいたしましたよ」

「見事な出来だな、しかし、おまえの術は主であるイーヴァルアイとも他の魔道師とも違う。それがベオークの術なのか」

「そうですね、わたしの術の師はバサラ様ですから」

自分の命の恩人を裏切るほどラドビアスはイーヴァルアイを思っているのか。その思いは自分の思いと同じ種類のものなのか、聞いたとしてもこの男は答えないのだろうな。

淡々と答えるラドビアスを横目にヴァイロンは苦笑いを浮かべた。州都のギリアンに入ると賑やかで開放的な町の様子にヴァイロンは驚く。首都であるサイトスに入るには都の東西南北に設けられた関所を通らなくては荷一つも届けられない。高い見張り台のついた障壁を張り巡らせて、その上に呪による結界まで張っており、整然とはしる大通りには兵士や魔道師が絶えず見回っている。そこしか知らない者には慣れた光景だが、ここを知ってしまうとどうにも大仰な気がしてくる。

これも帰ったらガリオールに要相談、だな。

「では行こうか」

「はい」

宿屋が軒を連ねている通りの一番奥手の宿屋から若い女の大声が響いた。

「何するのよ、この変態っ」

「客に向かつてその態度は何だ、このあばずれめ」

なにやら物がぶつかって割れる音や木のばきばきと折れる音がする。朝っぱらからやりあっているのはこの宿屋の娘、エレヌと中年の行商人らしい腹の出た赤ら顔の男。

「申し訳ありません、朝食のお代は頂きませんからどうか腹を収めてくれませんか」

宿の亭主の申し出にやりと笑って男は振り上げていた椅子を下ろした。

「おれはいいが連れがどう言うかな。おれの連れは気が短いのでな」  
「お連れ様、ですか」

亭主が後ろを振り向くとフードを深く被ったローブ姿の男がゆりと立ち上がる。

「こんな無礼な扱いを受けたのは初めてだな。許してほしいならその娘を一晩さしだすか、気持ちを包んでもらおうか」

赤ら顔の男が下卑た笑いを浮かべたのを見て亭主は小さく舌打ちする。客商売をやっている以上、言いがかりをつける客や宿代を踏み倒そうとする客は少なくない。だから付け入られないよう上手くあしらうようにしているのだ。だが、自分の娘ながら気の強い今年十六になるエレーヌときたらそんな腹芸の一つ、出来はしないのだ。

「何、ずうずうしいことを言ってるのよっ、人のお尻触っという金をよこせだって？ 訳わかんないことを言わないでよ、このタコ」鍋を振り回して勇ましく言い放つ娘の姿に亭主は頭を抱える。

「娘、口が過ぎるぞ」

フードの男が印を結んだ。途端に娘が悲鳴とともに宿の飾り扉ごと通りに飛ばされる。大きな物音に周りの宿から物見高い人々が通りに出てきて大騒ぎになってくる。

「どうした？」

「娘が倒れてるぞ」

「宿屋のむすめだ」

「エレーヌちゃんだ、大丈夫か」

「い、痛い」

手を突いて体を起こそうとしたエレーヌの目の先に皮のサンダル履きの足が見えた。

「大丈夫か、手につかまれ」

目の前に白い手が差し出されてエレーヌがつかまると細い手に似合わず、思ったより力強く引っ張り上げられる。そして相手が杖をついているのに気付く。

「ごめんなさい、足が……悪いのに」

エレーヌは謝りながら相手の顔を見上げてぱつと顔を赤くしたま

ま固まっちゃった。

なんて綺麗なの？ お話のなかの王子様みたいだ。 太陽に反射するシルバーブロンドの髪、アーモンドの形の瞳は濃い紺色。 細いがしつかりとした鼻梁、きりつと引き締まった口元。 とにかくこの十六年間生きてきた中でこんなにも洗練された美しい男性を見たことがないのは断言できる。

「どうかしたのか」

瞬きもせず、見つめる少女を前に、所在無げにヴァイロンは後ろのラドビアスを見る。 そこへ中から赤ら顔の男とフードの男、真つ青な顔の宿屋の亭主が駆けつける。

「大丈夫か、エレヌ。 お客さん、何てことをするんです。 お金でもなんでも出すから出て行ってくれ」

「無礼な口をきくなっ」

宿屋の亭主に向けてフードの男が印を結ぶ。 が、それをラドビアスが長い袖口の中で反呪の印を結んで呟くように唱える。

『反呪、我の命により元主に帰れ』

大きな爆風を受けてフードの男は赤ら顔の男を巻き込んで店の外壁にぶつかり、気を失った。 そこで笑い声と喝采が上がり、皆それぞれに自分の宿に帰って行く。

「ラドビアス、行こう」

「ヴァイロン様」

ヴァイロンも歩きだしたが、困ったような声を出して付いて来ないラドビアスに振り返ると、さっきの少女がラドビアスの上着のすそを引っ張っていた。

「旅の人、今日の宿は決まっていますか」

「いや、まだ日も高いし決めていないが」

「じゃあ、うちにしてください」

少し、たじたじとしてヴァイロンは助けを求めるようにラドビアスを見た。

## 開く竜門

「そうですね、湯も出ないような安宿では困りますよ」

「何言ってるのよ、うちはちゃんとした浴場もあるし、ここいらじや食事が一番って評判なのよ」

考えるように顎に手をやるラドビアスに勝気さを取り戻したエレ

ー又が挑戦的に言い放つ。

「一人、五百ダルでいいわよ」

「朝食つきでなら」

えっ、とラドビアスの言葉に一瞬エレー又は考えたがどうしても泊まってもらいたい気持ちがあるため強くすることはできない。

「わかったわ、そのかわり前金でお願い」

ラドビアスに答えると店の中に取って返して大声で叫ぶ。

「父さん、お客様二名様入ったわよっ」

そして店から顔だけ出して二人を招いた。

「早く、お客さん。一番良い部屋に案内するからね」

ヴァイロンは娘にうなづいて宿に入った。しかしラドビアスのやつ、市井の宿賃の相場を何で知っているのだ。しかも朝食をつけさせるなんて。娘が困った顔をしていたということは普通別料金なのだろう。

「お金に困っているわけでもないのになぜあんな事を？」

「お金は無駄に使いたくはありませんので」

首を傾げるヴァイロンにきっぱりとラドビアスは答えてすまして歩いて行く。通された部屋は城の中のように天蓋付きの寝台に水鳥の羽毛の布団とはいかないがなかなか快適そうだ。少し早めの昼食を下の食堂で頼むと娘の言うとおり、どれもなかなか香辛料が少しきついが美味しい物ばかりだった。

「魔道師の戒律で食べられない物とかあるのじゃないのか」

ヴァイロンは差し向かいに座るラドビアスに声をかける。

「ああ、動物の肉と確か魚もダメだったかと」

「え？」

スプーンを取り落としそうになってヴァイロンはすまして羊肉を食べているラドビアスを見た。

「それで……いいのか」

羊肉を飲み込んでラドビアスはデカンタからワインをグラスについでごくりと飲んだ。

「はい、わたしも主も別に戒律なんぞに縛られておりません」

女犯するべからず。

賭博に興ずるべからず。

獣肉、魚肉を食するべからず。

深酒をするべからず。

「ほかにもまだまだあったかと思いますがあんなもの魔道を宗教のように権威付けしたいガリオールがせっせと作ったものですからね。あの子は何事も型苦しいことが好きで困ったものです」

鼻息一つで戒律を蹴散らしてラドビアスは焼きたてのパンに齧りついた。そこへエレヌが水差しを持ってテーブルにやって来た。

「お客さん、料理はどう？」

「とても美味しいよ、ここの料理人は腕が良いな」

どう、と聞く割には腰に手をやって顎を上げているその態度は美味いという言葉しか受け付けないように見えるが、実際美味しかったのでヴァイロンは笑いながら娘に答えた。

「お客さん、ちょっと待っててね。克蘭ベリーの焼き菓子があるから持ってくるね」

またしても顔を真っ赤にしたエレヌはだつと厨房のほうへ走って行く。ヴァイロンは他人の女性からこんなに気安い口をきかれたこともなくどうしていいかわからず、無言で娘を見送った。

「食堂を走り回るのは止めてほしいですね、埃がたちますから」

ラドビアスが肉でべつとした口元を布で拭きながら言った直後に足音も高く娘が焼き菓子を運んで来た。

「ありがとう。こんなにサービスしてもらってお父さんに怒られないかな」

「お客さんに心配してもらわなくてもうちは結構繁盛してんだから」「それなら遠慮なくいただくよ。それと少し聞きたいことがあるから良かったら座ってくれないか」

ヴァイロンの言葉にあ、とかいえ、とかもごもと言いながらエレーヌはヴァイロンの斜め向かい、ラドビアスの横に腰を降ろす。

「この町はいい町だが女性の姿が少ないような気がする。何かわけでもあるのか」

ああ、そのことねとエレーヌは眉を顰めた。

「みんな怖がつて女は外にでないようにしているのよ。お客さん、ここに来たばかりじゃ知らないと思うけど。このところ若い女ばかり急に姿を消しているから」

「消える？」

ヴァイロンの問いかけるような顔にエレーヌは思い出すように首を傾げる。

「たいていは女の子が一人のときにいなくなるんだけど。前に果物屋のモーリスが彼女のスーリーを家のすぐ前まで送って行って帰ろうとしたらスーリーの悲鳴が聞こえて。慌てて引き返したら彼女が道に現れた穴に引つ張り込まれるところを見たんですって」

そこで宿屋の亭主の声が彼女の話を抑える。

「エレーヌ、早く手伝つとくれ」

「ごめんなさい、行くわね」

残念そうに立ち上がってエレーヌが去っていくのを待ちかねたようにヴァイロンがラドビアスを見る。

「竜門じゃないか」

「そのようですね」

誰が何のために　いや、誰がというのはかなりしぼられてはい



るが。魔道師以外は竜道を通れるわけではないのだ。

「おまえ、何か知っているのか」

たくさんの女たちを攫って何をするつもりなのか。ヴァイ

ロンは過去の嫌な記憶を思い出して顔を曇らせる。

「さあ、主はこの事には関係しておられませんよ」

「では調べねばなるまいな」

「仕方……ありませんね」

またもやいつもらしくなくはつきりしないラドビアスの返事にヴァイロンは何か知っていると確信したが口には出さなかった。

「どこから調べる？ さつき宿屋の娘が言っていた果物屋の男に話を聞こうか。しかし、魔道師どもが良からぬ企みで動いているとしたら、おまえやガリオールのぬかりが大きいのではないか」

「お咎めは後でなんなりと受けます」

ヴァイロンの方を見ずに言うラドビアスは宿を出て、通りを歩いていた男からモーリスという男の居場所を聞きだしていた。その果物屋は大通りから一本筋を入った通りにある小さい店構えで目指す男もすぐに見つかった。男は呼び込みをするでもなく、果物を盛った台の横に自分も商品でもあるかのように腰を下ろしている。近づくとうたた寝をしているようだったが二人が店に入る物音に気がついたのかぼんやりと目を開けた。

「あ、いらっしやい。何にしましょう？」

「悪いが客じゃない、おまえに話がある」

ヴァイロンを見て男は店の裏に逃げ込もうとしたがいつの間にか背後には上背のある男が立ち塞がって彼の退路を封じていた。

## ザーリア事変

「何だよ、おれは何も知らねえよ」

男はおどおどしながら上目使いでヴァイロンを見ながら隙あらば逃げようと身構えている。

「おまえの彼女がどこで消えたのか教えてくれさえすればいい」

「だから、おれは何にも知らねえって言ってるんだろ」

不貞腐れたように言う男は背後のラドビアスが懷をさぐるのに氣付いてびくりと体を震わせた。

「我々と一緒に行つて場所を指差すだけでいいんですよ。今日の商売はこれくらいにしたらどうです？　この商品は全部わたしどもが買いましょう。暫く店を休んで体をやすめてはいかがですか」

ラドビアスは懷から出した袋から金貨を五枚ほど男の手にのせてやる。刃物でも出すのかとびくついていた男は心底ほっとして今度は金の重みにごくりと唾を飲み込んだ。

「わかった、指差すだけだぞ」

「それでいい」

男の後を歩くラドビアスの背中にヴァイロンは呟くように言う。

「おまえいっぱしの子商人のようだな」

「お金はこんなふうに使つてものですよ、ヴァイロン様」

ラドビアスはにやりと笑つて見せた。男について歩いて行くとちやうど袋小路になつていゝ場所男は止まる。

「ご苦労だったな、もう行つていい」

その声が終わる前に男は走り去つた。一、二年は遊んで暮らせるほどの金だがこの街から出て行くつもりかもしれない。

「何かわかるか」

「はい、確かにここに竜門が一度開いたのはまちがいないようです。痕跡が　あります」

ヴァイロンから見ると何も見えないのだがラドビアスは差し出し

た手を見つめてヴァイロンを振り返った。

「竜道を通れる者は竜印のある者か、ペンダントをしている者、だったよな。ペンダントの管理はどうなっている？」

「ザーリア州の州宰はペンダントを持っているはずです。州宰の任についている者は頻繁にサイトスやゴートの廟と連絡をとる必要がありますから。ここから逆に竜道を辿<sup>たど</sup>ってみましょう」

ラドビアスが印を組んで呪を唱える。

『アルベルト、ルーファス、サイロス、解せよ』

ぽつかりと開いた闇にもう一度印を組んで呪を唱える。

『逆手、逆用、後を追え』

「サイロス、この道を通った者の後を追ってどこへ抜けたか報告せよ」

「御意」

人間の声であるようで金属とも風の音とも聞こえる声を残し黒いもやの塊りが闇の中へ消えた。

「ラドビアス、今のがサイロス？」

あの廟にいた三人の内、最後に竜門に引き込まれたイーヴァルアイの従者、生きていと言っていたが……。

「ということはアルベルトやルーファスとも話すことができるのか」

「はい、印で開放すれば。しかし、今は一人を解放しておりますので竜門を二人で守護している間は無理ですよ。話をしたかったですか」

勢いこんで尋ねるヴァイロンに早く言えば良かったのになというふうにラドビアスが答えてヴァイロンを憮然とさせる。

「おまえは通じている事としない事に落差がありすぎるよ、まったく。アルベルトもルーファスもわたしには大切な臣だったのだから」  
闇の中にもう一つの闇が帰って来た。

「道は州城内に通じておりました」

よく聞かないと取りこぼしそうな声。

「このザーリアの州城か」

「はい」

「戻れ、サイロス」

ラドビアスが印を組むと黒いもやは霧散し、闇に溶けた。

「州城に　行くことになったな」

「荷を取りに一旦、宿に戻りましょう」

ヴァイロンにうなづいてラドビアスは竜門を閉じて、宿に戻るヴァイロンの後に続く。

「お帰りなさい」

ヴァイロンの姿を認めて手を振りながらエレーヌが二人を宿に招き入れる。

「ただいま、しかし悪いのだが今日、出発することにしたんだ。宿代は今日前払いしている分に明日の分まで払うよ　それと、あの話に聞いた果物屋の商品を全部引き取ってくれないか。代金は払っているから」

ヴァイロンの言葉に啞然とする娘の手にヴァイロンの後ろに控えていたラドビアスが金を握らせてそのまま部屋に入っていった。心底がっかりしてエレーヌは部屋を振り返りながら階段を下りていく。

素早く着替えを済ましたラドビアスが杖を剣に戻して机に置くと竜門を開いた。そしてまだ着替えているヴァイロンに声をかける。「一旦、ゴートの廟に戻り主にこの事をお伝えした後、州城に参ります。王が来城することを先触れなしでは先方も困りましょうから先に州宰と会って参ります。すぐ戻りますのでお待ちください」

言い置いてラドビアスは竜門をくぐった。そこへノックの音があるやいなや元気の無い声とともに部屋の戸が開いた。

「お客さん、最後に美味しいお茶を……」

鍵を、かけ忘れていた。　客室に入るのにまさか客の意向を

聞こうともしないで戸を開ける者がいるとはヴァイロンは思いもしなかったのだ。あつと思う間もなく開いた戸からエレー又は部屋の中に消える闇を見て盆を取り落とした。

「こ、これってつ、た、助けて」

その先はヴァイロンの手に口を塞がれて続かない。

「わたしは娘たちを誘拐はしていない。それを調べようとは思っているが」

エレー又は最初のやみくもな恐怖が薄れてくると背後から抱きかえられている形になっている今の状態にのぼせてしまっていた

この人、水仕事も力仕事もしない人なんだわ。なんて綺麗な指なの。

「手を離すよ、声を出さないでくれるね。何もしないから」

こくりとうなづくエレー又はヴァイロンは彼女から離れた。

「悪かったね、乱暴な事をして」

「いえ、そんな。わたし嬉しかったし……じゃ、なくて、あの、何言っているのかしら」

どぎまぎと言いながら目の前に立つヴァイロンを見てもう一度大声を上げそうになって自分の手で口を押さえた。

本当に王子様なの？

このザーリア州では少し暑そうだがきつちりと仕立ててある深い紫の上着の下に着ているのは、レースが襟と袖にたっぷりついたシャツだ。複雑に糸を絡めて作られるレースは手のひら大の物が砂金一袋分もする最高のぜいたく品なのだ。ぴったりとしたズボンに鹿皮のブーツを履いている。このザーリア州でブーツを履いている者などいないがそのいでたちがあまりにも王子様然としていたためエレー又はうっとりヴァイロンを眺めた。

「戻りました」

いきなり現れた闇の中から人が出て、エレー又は夢から覚めたように再び声を上げそうになったが気付いたヴァイロンに口を塞がれて目を白黒させた。

「 どうしたんです、これは」

ラドビアスは目の前の状態に目をしばかせる。

「 鍵をかけるのを忘れていたんだ」

「 そう、ですか。見られましたか」

灰青色のフードをはねのけて顔を見せた男はヴァイロンの従者の男だった。 その男がずっと口を塞がれているエレーヌに顔が付くほど近づいて声を落として言う。

「 今見たことを人にしゃべると身に障りがありますよ」

言うってから目を離すこともなく後ろに下がると大きく手を振り回すように印を結んだ。 呪をかけられたと身を固くしたエレーヌを見てにまりと笑うとラドビアスはヴァイロンに声をかける。

## 秘密

「参りましょう」

そうだなと娘を気にしながらもヴァイロンは竜門をくぐった。

「おい、あの娘に何の呪をかけたのだ？」

「あれですか、あれは呪ではなく良縁を願うまじないですよ。わたしの郷里で若い娘が年頃になるとみんなで何かの折々にするのです。まあ、気休めですが」

悪戯っぽくラドビアスが笑いながらヴァイロンに答えた。

「だが、さっきの顔はかなりの悪人面だったぞ」

ヴァイロンの指摘にそうですかねえと、ラドビアスはくつくつと笑う。先の使われた竜道を辿るとそこは岩肌がごつごつとした足場の悪い竜道だった。整備されていない竜道は体にも良くないのかわずかに気分が悪くなって足元がふらつく。真っ暗な中に指の先ほどの光が見えてきて、竜門から出るとそこは竜道にくらべれば明るいものかなり薄暗いじめじめした所だった。石積みの隙間から水が漏れているのか石畳の床も濡れて滑り易くなっている。

「ここは州城の地下のようだな」

「そのようですよ、そこを開けて上へ出ましょう」

大きな錠前の鍵穴に指をあててラドビアスは印を結ぶ。ばかりとする音と閃光のあとに錠が外れてラドビアスの手に落ち、それをていねいに下に置いて戸を押し開いた。

「いいですよ」

「おまえが道を誤ったら恐ろしいことになるな」  
ヴァイロンが小さく溜息をついた。

「そういえば、私利私欲に術を使うのも戒律で禁止されていますよ、ガリオールは頑張っておりますね」

けるつとラドビアスは言う通路を見渡す。 続いて出たヴァイロンは水の匂いに惹かれて右側に折れる。

「上に行くには左だと思いますが」

「少し、調べたい」

ヴァイロンの後へラドビアスが一瞬躊躇ちゆうちゆうした後に続く。しばらく行くと水の流れる音が大きくなり、足を速めて角を曲がったヴァイロンの目の前に大きな空間が広がる。ザーリア州城の地下に広がるのは大きな船着場と大きい水路、そこに付けられているのは大型の帆船だ。

「これは 随分と大掛かりなことをしたものだけどどこに続いているものだろう」

ザーリア州は温暖な気候のおかげでいろいろな作物が採れるが貴重な香辛料が採れることで有名である。長い冬をのりきるため肉を加工するのに香辛料はレイモンドールにおいてとても貴重であり、それを陸路で運んでいると思っていたが海を使っているのか。

しかし、中型の船までならともかくレイモンドールは海岸線に沿って結界を張っているのだ。大型船を通すほどの深さがあるはずもない。では何のためだ。

「そろそろ上に参りませんと」

ラドビアスの声にわれに帰ってヴァイロンはうなづいた。上に出ると警備の兵や官吏、城詰めの貴族たちが突然現れた王にまさに蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

「国王陛下、なにゆえの急なお越しでございますか」

州候のレーニエが後ろに州宰を控えさせて息を切らせながら挨拶をした。何の用だといわんばかりの言い方だったが、よほどレーニエを驚かしたものらしい。

咎めるのも大人気ないとヴァイロンは心の内で思った。

「悪いな、国中を視察しようと思いつたので一番はここにしようと思ってな。連絡が行き届かなかったようで驚かせてしまったようだ」



先に国王にあつさり謝られては何も言うことなど無くなつてしま  
い、黙り込む州候の後ろから州宰が続ける。

「ようこそ、おいで下さいました。州宰のリードルと申します。サ  
イトスにくらべてのんびりとした田舎ですが気候は穏やかでござい  
ましよう？ ごゆっくりお寛ぎいただけますようすぐにお部屋の支  
度をしますので貴賓室でお待ちくださいませ」

ヴァイロンの数歩先を体を斜めにしながら歩く灰青色のフードを  
被った州宰の後ろで、こっそりとヴァイロンはラドビアスに話しか  
ける。

「あの船と女たちは関係あるのだろうか」

「さあ、でも州候の驚き方はふつつではありませんでしたな」

ラドビアスはわずかにこわばった顔で答えた。州宰は二人を貴  
賓室に案内すると再度州候とともに挨拶に伺う旨を伝えて下がって  
行く。

『聴視、防壁を築き我と王を守れ』

ラドビアスが印を組んで呼ばわると密かに声が是と答えた。

「間諜の使い魔を放っておきました」

「で、州候と州宰がかかわっていると見るが一体、何をするつもり  
かな」

「竜道を使って女たちを攫<sup>さら</sup>っているということは人身売買とか、女  
たちの体目当てではないでしょう。女たちは瀕死の状態だと思われ  
ますから」

「目的は 血だよな、おそらく。しかし、そんな大量の血を使っ  
て何をするつもりなのか。大体、血を使った術を行う者は限られて  
いるのではないか」

イーヴァルアイか、イーヴァルアイに竜印を刻印された者。

「竜印はイーヴァルアイしか刻印できないのか」

わずかに目を伏せながらラドビアスは立ち上がった。思わず、  
といった風情にヴァイロンの目がきつくなる。先程から様子がお  
かしい。ラドビアスが今までこんなに取り乱したのは数えるほど

しかない。

「ラドビアス、話は終わってないぞ。座らないか」

「　　ヴァイロン様、先ほどのご質問のことですが」

いつも顔色が悪いがほとんど血の気がない青い顔で、ラドビアスはぼそりと切り出した。

「主に直に竜印を頂いた者なら竜印を刻印することができます」

「今、竜印を刻印できるのはイーヴァルアイとおまえ、ガリオールとルークの四人だけだな」

「主は今ダラム海沖に出ておられて術式を行っていらつしやいます。ルークが補佐しています」

「ガリオール、ではないんだろう？　ラドビアス」

では答えは一つしかない。

「ラドビアス、なぜだ……」

ヴァイロンの問い詰める声を断ち切るように人が来ます、と声が聞こえた。

「州候レーニエが参りました、陛下」

「入りなさい」

ぎくりと体を振るわせたラドビアスは気にはなるが。　部屋に正装した州候と魔道師姿の州宰が揃って入って来たことで詮索もできない。

「先程はみつともない姿をお見せして大変失礼いたしました。妹は、ルシーダは健勝にしておりますか」

四年前に父親の崩御に伴い候位を継いだレーニエはルシーダより十二歳くらい上だったはずだ。　その歳の新年の挨拶にサイトスに來城して挨拶をしているがそのときより随分と肉がついて貫禄が増したようだ。

「ああ、元気だ。正式な訪問ではないので式典も晩餐会ばんさんかいも遠慮させてもらいたい」

「そ、それは。まさか何もおもてなしをしないなどと……」

「お願いするよ、見かけはともかくわたしも随分と歳を取って堅苦

しいことは疲れるようになってきていてね。ゆっくりさせてくれる  
気があるならそうしてくれ」

「そんなお歳とはお見受けできませんが。わかりました。ではご入  
用の物がありませんしたら何なりとお申し付けくださいますよう。失礼  
いたします、陛下」

レーニエは首を傾げながら部屋を出て行く。

「お疲れですか、ヴァイロン様？」

「そんなわけがないだろう。歳なんて思い出さなければ忘れてしま  
う。ところでおまえ、誰に竜印を刻印したのだ」

そう、言ってからだとヴァイロンは気づいた。

二十年前からここで何かが動いていたのか。あの頃、婚儀  
のことで足繁くラドビアスはザーリア州に出かけていたのだった。

「ルシードをだしにして何か企んでいたのか、おまえ」

「ヴァイロン様」

顔を青から白くして耐えるようにじつと下を向くラドビアスはま  
るで拷問を受けているかのように小さくヴァイロンの名前を呟いた。

## 密輸

「わたしはともかく、おまえ、イーヴァルアイを裏切っているのではないだろうな」

「わたしは主を敬愛しております」

これ以上は何も答えないときっぱり言い切るようにラドビアスはヴァイロンの目を見る。ヴァイロンはラドビアスから顔を背けて溜息をついた。何年付き合ったとしてもこの男の内面まではどうても自分にはわからない。

そのまま夜を迎えて鬱々（うつうつ）としていたヴァイロンは誰かが扉を開けたのに気づいて起き上がった。

「ヴァイロン様、地下に動きがあったと使い魔が知らせてきました」  
「わかった、行こう」

二人は船着場を見下ろす場所へ竜門を開けて音を立てないように潜んだ。大勢の水夫が荷を運んでいる。昨日は聞こえなかった、獣のような声は女たちの声のはずだ。ヴァイロンは昔を思い出して顔を歪める。突然の王の来州に慌てた州候が計画を早めたのだらう。

あの荷は香辛料、ということとは密輸をしようとしているのか。女たちを使って結界に穴を空けて国境を破ろうとしている。

レイモンドールは国境に結界を敷いているため、こちら側からも他国へ自由に交易するわけにはいかない。荷はすべて首都サイトを經由して船を出さないと大陸側には出られないのだ。サイトス以外の港は国内向けに荷を運ぶ中型船までしか出航できない。

戦乱の時代から何十年も経って、他国からの進入を防ぐ結界を感謝するよりも不便に感じる世代が出てきたのは仕方ないのかもしれない。しかし、それを許すわけにもいかない。

「もう少し近づくぞ」

「はい」

物陰からすぐ前を通る魔道師の口を塞いで後ろから引き倒しざま、横にいる魔道師の腹に拳をいれる。そこへラドビウスが短剣で首の後ろを次々と刺してあつという間に息を止めた。奪った薄茶のローブのフードをすつぽりと被って船の近くへ寄ると州宰の魔道師、リードルが二人を止めた。

「その二人、止まれ」

リードルが恐ろしい勢いで飛びこんで来たと思うとヴァイロンの首に剣をつきつけた。

「サンテラ、その手の中にあるものを離せよ」

にやりと笑うリードルの言葉に、ラドビウスは手の中の短剣を落とす。

「おまえ、何者だ」

「これは国王陛下、お初にお目にかかります。わたしはベオーク自治国から参りました、インダラといえます。ああ、リードルのままでしたね。失礼しました」

男は片手であっさりと印を結ぶとリードルの体を脱ぎ捨てるように横に払った。そして現れたのはラドビウスほどの長身の男だった。目を惹く、切れ長でつり上がった目元。きつく頭頂部で結んだ髪は一本の黒い絹のリボンのように腰まであり、インダラの動きにつれてゆらゆらと揺れている。着ているのは襟の高い合わせが片側にあり、長い上着の両側に深く切れ込んでいるもの。その下に幅広のズボンを履いている。

インダラというといーヴァルアイの兄の僕だったはず。と  
いうことはベオークが裏で糸を引いているのか。

「リードル、おまえ……」

州侯のレーニエが口をあわあわさせて後ずさり、後ろに立っていた大柄な魔道師にぶつかり止まる。

「レーニエ様、大丈夫ですか」

大柄な魔道師はがしりと州候の肩を抱いた。しかし、ほっそりとした者が多い魔道師の中にあつてこの男は異様なほど縦にも横にも大きい。男は深く被っていたフードを上げてヴァイロンの方に顔を向ける。

「久しぶりだな、ヴァイロン。サイトスでは世話になったな」

「ドリゲルト」

そんな馬鹿なと愕然とするヴァイロンににまりと貼りついた笑みを見せているのは、ドリゲルトその人だった。しかし、その姿は昔のままだ。ということはラドビアスが竜印を刻印したのはこの男だったのか。だが、ドリゲルトは呪をかけられて廃人のようになっていたはずでは……。

「久しぶりの対面に喜んで言葉も無いというところか、ヴァイロン？」

言うが早いか腰から抜いた剣を振りかぶって一とびでヴァイロンの頭上に降りて来る。とっさに反応出来なかったヴァイロンの横からラドビアスが地面の短剣を拾い、ドリゲルトの剣を弾いた。

「何のつもりだ、サンテラ。わたしの邪魔をするとは」

「ヴァイロン様をどうなさるおつもりです、バサラ様。お約束が違えます」

「約束 何の約束だったか。忘れたな、インダラおまえ覚えているか」

「さあ、存知ませんが」

「だってさ、悪かったな、サンテラ」

ドリゲルトは印を組んで自分の体を引き裂いて捨てた。その中から現れた人物にヴァイロンは息を飲んだ。亜麻色の髪で水色の瞳、薄い唇が半円を描いてにまりと上がる。

「主人に刃物を向けるなどとは物騒な僕だな、それでわたしをどうしようというのだ」

バサラと言われた男はラドビアスの手からあっさり短剣を奪い取る。イーヴァルアイと同じ親から生まれたのは紛れも無い事実だ

ろう。髪も瞳も顔立ち全てが驚くほど似ているのだ。双子のよう……といかないのはその差異が男と女の違いのようなものだからだ。

バサラは長身の大人の男なのだ。イーヴァルアイの女性と見紛う外見とは一線をかくしている。

「命を助けてやった恩を忘れてさっさとカルラに鞍替えするような奴には罰がいるな」

その言葉が終わらぬうちに、ラドビアスの胸に奪った剣を突き立てる。

「バサラ様」

バサラはがつくりと膝を付くラドビアスを突き飛ばしてヴァイロンの腕を掴んで引き寄せる。

「おまえ、カルラにいいように操られているのに仲間だと思っているんだろ？」

「どういうことだ？ カルラとはイーヴァルアイのことか」

「そうだよ、そしてこの島に結界を張ったのだからおまえのためじゃない」

唇の右端をにつと上げて笑うその仕草までイーヴァルアイそのものだった。

この男のペースに巻き込まれてはいけないと思う気持ちと、バサラの話を聞きたい気持ちの板ばさみになってヴァイロンは身動きが出来ない。その様子をわかつているのか、バサラは薄く笑った。

「じゃあ何のためだというのだ」

「それは 我らから逃れるため、だよ」

「逃れる？」

「奴は重罪人だからな、だいたいあいつは……」

「ヴァイロンにいらぬことを吹き込むのはその辺にしておいてもらいましょう」

バサラの言葉は彼と同じ質の高めの声に断ち切られる。

「イーヴァルアイ」

イーヴァルアイは竜門を閉じてヴァイロンに目を向けた後、しゃがみ込んでラドビアスの胸元から短剣を引き抜く。

「それからわたしの僕にちょっかいを出すのも止めてもらいましうか」

「カルラ様」

「その名を呼ぶな、ラドビアス。手間をかけさせるなよ。おまえはわたしの僕だろう、ふらふらするんじゃない。何のために結界を張ったのかわかないだろう、ぼけっ」

「おいおい、サンテラはわたしの僕だと思っただけど。それにしても相変わらずお転婆だな、カルラ。まあ、そこがいいんだけど」

『ラグズ、ティワズ、ハガラズ、イス』

イーヴァルアイは大きく宙に範字で『力』を描くと印を切る。

その手からは激しい水流が噴出してバサラのところへ届くころには氷化し、たくさん矢のようになっていた。



## 変成、変転、変容

その剣をくるくると回してつららを跳ね飛ばしながらバサラが楽しそうに笑った。

「古代レーン文字を組み合わせたか。良く勉強したな、カルラ。だけどまだまだ甘いな、これでは術を出すまでもないな」

そう言うにつららの剣が飛んで来る中をバサラは、そのまま突っ込んで来る。そこでイーヴァルアイの腹に拳を一発見舞い、怯んだところを体を返してイーヴァルアイの両腕を片手一つで拘束する。「ベオークの魔道師は体術と剣術も必須なのがどうしてか、わかったかい？ おまえは術に頼りすぎなんだよ」

「お二人の仲の良いのはわかりましたからわたしの竜印を取っていただけですか、カルラ様。サンテラは今、使えませんし。二つの竜印があるのがこんなに体に良くないとは知りませんでしたよ。四六時中体の中を焼かれているようです。だいたい、一つの体に二つの龍を封じるなんて無理というものです」

インダラが不平を言うように口をとがらせて割って入る。

「わたしが竜印を刻印された時点で、竜門を開けてカルラ様の所に行つて用を済ませばさっさと終わるのに。ザーリアくんたりまで来て州候と遊んでいるから時間がかかってしょうがないじゃないですか」

「だって面白いじゃないか、それにこのままカルラをベオークに連れ帰ったらこの島の結界は消えないし。なら、ここで結界に穴を空けてベオークの支配下におけるようにしたほうがいいだろ？」

「ごもつともなご意見ですけど。今考えたんでしょう、バサラ様」

「ばれたか。カルラ、悪いけどインダラの竜印取ってくれる？」

「誰がやるか」

イーヴァルアイの答えに仕方ないなとバサラはイーヴァルアイの手を離す。電光石火、ヴァイロンの首に手をかけるとそのまま引

き倒して手に力を入れる。

見かけからは想像も出来ない速さと力に成すすべも無くヴァイロンは目の前が暗くなる。

「もう一度だけ言うけど、インダラの竜印取ってやってよ、カルラ。わたしもいつまで力加減ができるかわからないよ」

バサラに大きく舌打ちしてイーヴァルアイがインダラの胸に手を当てる。

『エワズ、ラグズ、ハガラズ、ケン』

言いながら印を組むとインダラの胸に右手を突き入れて、立体化した竜印を引き抜いてそのまま地面に投げ捨てる。

『滅せよ』　イーヴァルアイの言葉に炎をあげて竜印は姿を消した。  
「いい子だな、カルラ」

バサラは起き上がるうとしたヴァイロンの後頭部を剣の柄で殴りつけて倒すとイーヴァルアイに近づく。そして竜門を開けようとしたイーヴァルアイの背後から抱き込んで止める。

「どこに行くつもりだ、もうどこにも行かせないぞ」

「離せ、変態、わたしに触るな」

「そんな態度が逆に誘っていることに気づかないとは本当にかわいいな」

バサラは、イーヴァルアイの体をあっさり反転させると頭を押さえて深く口付けた。

その様子にインダラが呆れたように文句を言う。

「バサラ様何ですか、こんな場所でこんな時に。もう、あなたって人は……そんな事はベオークのご寝所でいくらでもなさればよろしいでしょうに」

「無粋なやつだな、インダラ。久しぶりに花嫁に会ったんだから少しは見逃してくれよ」

薄く意識の戻った頭でヴァイロンはそのバサラとインダラの会話を聞いていた。

花嫁？　何のことだ。

痛む頭をかすかに動かして声の方を見るとバサラに抱きしめられているイーヴァルアイが目に入る。その姿は昔見た気がする。そうだ、あの晩のうなされていた時の顔、だ。

声無き声がヴァイロンに聞こえる。助けてと、言っているのだ。助けて、ヴァイロン。

ヴァイロンは咄嗟にローブの下から剣を取り出してねらいをつけて力一杯投げる。剣はその物の力でもあるのか鋭い弧を描いてバサラの腕に突き刺さった。

「これは 護法神、なぜここに？」

見る間に剣が突き刺さっているところが灰色になっていく。

「腕を切れ」

ズサツという音とともに切り落とされるバサラの左腕は、地面に落ちて砕けて砂のように山を作る。バサラの腰から剣を抜いてバサラの腕を落としたのはラドビアスだった。

「くそつ、出直した。インダラ行くぞ」

『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』

形勢が不利になるとみるや、片手で印を組んでバサラがインダラの背中を突くとインダラの姿に変化がおこる。皮膚がかさかさと捲くれ上がったかと思うとそれは鱗に変わる。四つん這いになった体は長く延びてびしりという音とともに長く尻尾が地面を叩いた。その姿は巨大な蛇のようであり、ヴァイロンの見たことのない物だった。頭部から後方に向けて大きく生えた角をつかむと、バサラは左肩から血を流しながら飛び乗り大声を出す。

「インダラ、贅<sup>にえ</sup>をつかまえろつ。それで結界を突破する」

大きい咆哮とともに翼も無いのにバサラをのせたその獣は飛び上がり、目の前にいた魔道師の一人を喰えとあつと言う間に天井を突き破って行く。その後、城全体を揺るがすような雷の音と振動がそこに居るもの全てを倒して 収まった。

「ドリゲルト様、お待ちを。私たちをお見捨てになるのですか」

州候のレーニエの叫びに答える応えも無くその声は反響を繰り返して消える。　　啞然とする者たちの中、イーヴァルアイがいち早く立ち直ってレーニエを見る。

「船に乗れ、レーニエ。出航だ」

「イーヴァルアイ、わたしも行く」

「だめだ、ヴァイロン」

「なぜだ」

「術をかけにいくからだ。女たちを使って結界の穴を塞ぎ、海域の地形を変える。この状況を逆に利用させてもらう。術に巻き込まれたくないだろう。それに」

「それに？」

「もう……見られたくない。わたしのおぞましい行いを」

顔を背けてイーヴァルアイはレーニエに術をかけ、後を付いて来させると水夫に命を下させる。　　船は大勢の人間と荷をのせて水路を進んで行く。

「ヴァイロン様、恐れ入りますがわたしをゴートの廟までお連れください」

苦しそくに喘ぎながらラドビアスは竜門を開ける。　　胸からは血がだくだくと流れている。

　　剣を抜いてバサラを助けたのだ、この男は。　　イーヴァルアイとわたしを裏切った。

「ここでイーヴァルアイを待つ」

「ここは主がいいようになさいます、ヴァイロン様」

「まだ、イーヴァルアイを主人だというのか」

「　　わたしの主はイーヴァルアイ様です」

苦々しく思いながらも崩れるラドビアスをそのままにしておけない。　　肩を貸すとヴァイロンは竜門を潜った。

## 息子との再会

一方、体を呪で動かされながらレーニエは船倉へと歩みを進める。それにともない生臭い匂いが鼻につき、吐き気をもよおす。内々に事をおこすつもりが王にばれてしまった。結界を破って密輸という大罪だ。州宰のリードルとドリゲルトという魔道師の口車にまんまとのせられたのだ。早く、王に釈明せねばとレーニエはあせるが口がいうことをきかない。

「その戸を開ける、レーニエ。早く入れ」

拒否する気持ちなど関係なく体は戸を開けて女たちが半死半生で呻いている船倉に足を踏み入れる。その後からイーヴアルアイが入って戸をきっちり閉めると戸に血で範字を描いていく。

「さて、始めるか」

イーヴアルアイは印を組んでレーン文字の呪文を唱えていく。女たちの体から絶え間なく血が流れる。レーニエは押さえきれない吐き気を覚えてしゃがみ込むが、出てきたのは吐しゃ物ではなく血液だった。彼は、意識が無くなるまで吐き続けて意識を失うころには体中の血液が無くなっていた。

その中で尚も続く呪文。少し前から聞こえる地鳴りのような音。船を中心とした一帯の海底に変化がおきようとしていた。海底の岩が隆起し、鋭い岩が次々と剣山のように海面に顔を出す。海は咆哮のような海鳴りの音とともに船を飲み込む。その後から沸き上がる白い霧。次々と沸きあがり目の前にある自分の手さえ見えなくなるうかと言う頃。それは収まり、海は何事も無かったかのように静まり返る。

他国の侵入も自国からも出ることのできない魔の海。この先、ザーリア州近海以外にも拡大していくのだ。

モンド州ゴート山脈の廟に竜門が開き、中からローブ姿の男とそれを支える男がもつれるように出てきた。

「誰か、ラドビアスが怪我を負った」

駆け寄って来た魔道師にラドビアスを託したヴァイロンはその魔道師の姿にはつとずる。赤い巻き毛のその若い魔道師が怪訝な顔をしてヴァイロンを見返した。

「おまえ、名前は何という？」

「クロードといいます」

そこで魔道師は、ヴァイロンの腰の長剣に気づいて慌てて頭を下げた。

「王陛下であらせられましたか、失礼いたしました」

「ああ、早くラドビアスの手当てを」

元気で暮らしているのだなとリチャードと瓜二つの魔道師の後姿を見送りながらヴァイロンは胸が熱くなる。そこへ灰色の長い前髪の魔道師が現れてヴァイロンに深く頭を垂れて挨拶をした。

「王陛下、ご無礼をいたしました。ここの者は陛下のご尊顔を存知あげない者ばかりで気付くのが遅れて申し訳ありません」

ヴァイロンに椅子を勧めて自分は向かいに立つ。

「いや、そんな事はいいが。おまえは？」

「はい、サイトスにラドビアス様が出向かれておられますので、その代わりに主のお世話をさせていただいております、ゴートの廟長のルークと申します」

それではこの者がガリオールとともにサイトスへ来た子どもだったか。そして竜印を持つ三人の魔道師の一人。灰色の長い前髪のせいで顔が半分くらい隠れているがとても穏やかに見える。が、魔道師だけは装っている外見と中身は違うことが多い。この髪と同じ灰色の目を細めて微笑んでいる魔道師も強力な術を使うのだ。「さっき、わたしの息子がいたようだか」

「ああ、クロード様ですね。ええ、こちらで魔道の修業をしておられますから」

「会えるか？」

「もちろん。ですがクロード様は恐れながら陛下を思慕する情は無いと思われませんが。それでもよろしいですか」

ルークは穏やかな口調ながらヴァイロンにとって残酷なことをずばりと言った。

「それでも　良い」

ヴァイロンの答えに、ではお待ちくださいとルークは部屋を出て行く。その後すぐに部屋の前から声が聞こえた。

「王陛下、クロードでございます」

ヴァイロンの入れと言う声に入って来た魔道師は扉の近くで立ち止まる。

「もつと近くに来て顔を良く見せてくれないか」

「はい」

ぎこちなくヴァイロンの近くまで来たクロードを思わず、抱きしめた。

「会いたかった。この二十年、おまえの事を忘れたことなど無かった。手元から離れたくなかった。許してほしい、クロード」

王に抱きしめられて固くなっていたクロードの体がふっと緩む。

「ではやはりわたしは恐れ多いことながら陛下の子どもなんです、何か変な気持ちです」

「何が変なのだ？」

クロードはくすりと笑う。

「だって陛下はこんなにも若い。わたしと少しも変わらないご様子なのにわたしの父親だというのですから」

サイトスにいるリチャードはそんな事も不思議とも思っていないだろうがクロードは違うのだ。長い別離による思いの隔たりにヴァイロンは愕然とする。

「陛下、わたしはリチャード殿下をしつかりお助けできるように修

業にはげみます」

につこりと笑いながらも失礼します、とクロードはヴァイロンの手から逃れるように身を離すと深く礼をした。

「そうだな、期待している。もう下がってよい」

ヴァイロンの言葉に明らかにほっとした表情を浮かべたクロードはそそくさと部屋を出て行く。

一度手を離してしまったものは元には戻らないものなのだろうか。ヴァイロンは急に歳を取ったような気がして椅子に深く座り直した。

それから 血まみれのイーヴァルアイが帰って来て、ヴァイロンも視察旅行などと悠長なことをしている場合では無くなる。 急ぎ傷を塞いだラドビアスを連れ、サイトスへ戻りザーリア州の後始末をつけなくてはならない。

密貿易を企てた州候と州宰はザーリア州の沖で結界を破るのに失敗して船ごと沈没して亡くなった、ことになっている。 それに繋がる者の処罰と官の刷新、そしてルシーダの母親、親戚に至るまでの官位と爵位の剥奪。 ザーリア州は王の直轄地扱いとなり、サイトスから官が長として遣わされることになった。

そしてルシーダを慰めるために一時もヴァイロンはサイトスから離れることが出来ずに瞬く間に冬が過ぎ、春を迎えた。

春と言っては申し訳がないくらいに冷たい風が吹く朝。

王の側付きとしてサイトスに留まっているラドビアスは朝日が昇ってもう、随分になるのに起き出さないヴァイロンに悪い予感を感じて王の寝室に急いだ。 扉の外の守衛に声をかける。



## 別れと出会い

「しばらく誰も入れないように」

そう告げて、ラドビアスは先触れも無しに静かに部屋に入る。

「陛下、起きていらつしやいますか」

呼びかけるような確かめるような声。寝台の横の机を見てあつ、と小さく声をもらす。机の上にある長剣がゆらゆらと陽炎のような光に包まれている。

一瞬それは形を変えて『鍵』に戻ると眩しい光を四方に放つて元の剣の姿になる。ラドビアスは胸を押さえながら寝台の布を掻き分けて王の様子を伺う。

落ち着いたわずかに上下する胸。しかし彼は愕然<sup>がくぜん</sup>と立ち竦んだ。

「早すぎる、急いで主にお知らせしなければ……」

ラドビアスの動揺を誘ったのはヴァイロンの変化。掛け布の上で組まれている両の手は血管が浮き、斑がいくつもある。顔にも容赦なく本来の年齢による老いが襲いかかっていた。彼はすぐに竜門を開けてルーファスを解す。

「主をお連れするのだ、王のご逝去が近い」

闇に消えるルーファスを確認してラドビアスは魔道師庁のガリオールの元へ急いだ。その途中でこちらにやって来る宰相でもある魔道師長の姿を認める。

「王のお体に何かありましたか」

「そうだ、祭祀を早急に執り行う必要がある」

「それはまた急な……」

「主には連絡してある、じきにおいでになるだろう。おまえもリチャード様、后妃様に至急お伝えしてくれ」

「承知しました」

ガリオールは浅くラドビアスに礼をするとロープを翻して走り去った。

うつらうつらと浅い夢の中にいた、ヴァイロンは自分の頬に触れられた感触に目を開ける。なぜか瞼が重い。しかし、それが垂れ下がった瞼のせいだとは気付かない。

「起きたか、ヴァイロン」

「イーヴァルアイ、何でここに？」

自分のしわがれた声にびっくりとしてヴァイロンは喉に手をやり、そのざらついた皮膚に驚いて手をかざして見る。

「これは」

その手を包むようにイーヴァルアイが両手で降ろす。

「ヴァイロン、時が……来たようだ」

「ああ、そうか。寿命が尽きようとしているのか。『鍵』の呪が切れたのだな。本来の姿に戻ったのか……お別れだな、イーヴァルアイ」

「わたしを」

「何だ？」

思いつめた顔のイーヴァルアイの双眸から流れる涙。

「わたしも一緒に連れていってくれ、ヴァイロン」

「そうだな、そうすればおまえはもう泣かないで済むだろうが。でもわたしにはおまえは斬れない。国のため、だけじゃない。おまえを　愛しているから」

「いやだっ、置いていくな、ヴァイロン。お願いだから、連れて行け」

節くれだった手を伸ばしてヴァイロンは、イーヴァルアイを引き寄せるとその唇に口付けた。

「いずれにしてももう遅い。『鍵』はわたしの意を離れているのだから。イーヴァルアイ、先に行くよ。そこでいつまでも待っている。おまえが来るのをずっと、ずっと」

「ヴァイロン、わたしは……」

「行け、おまえのやるべきことをしろ。結界を守り、国を守ってくれ、約束だ」

言ってヴァイロンはイーヴァルアイの体を離して目を閉じて呟く。「これで良かったのか。もっとやるべきことが自分にあつたろうか。いいや、これで良かったのだ。契約を続けるのも是正するのも次代の王にまかせよう」

「わかった、約束は守る。だから必ず、待っているよ、ヴァイロン」

自分の傍らから立ち上がるイーヴァルアイの気配が消えて、ことりとヴァイロンは意識を混濁こんたくの淵へ落とした。

「サイトスへ行く」

イーヴァルアイの言葉に書面に目を通していたラドビアスが顔を上げた。

「もう、コーラル陛下のお子様をお迎えする時期でしたか」

イーヴァルアイはああ、と言ったきり黙り込んだ。心得顔でラドビアスは竜門を開ける。主は王の子どもを引き取りに行く時はいつも不機嫌になる。もう何回となく繰り返していることだが、ラドビアス一人に任すことはしない。それが自分に課せられた罰なのだというように王の子どもを選び、連れ帰る。

最初の王、ヴァイロンから子どもを奪った時のことを毎回思い出しているのだろうか。何百年経っても主の頭の中を支配しているのはヴァイロンなのだ。

すでに側にいないことにほっとしている自分に、ラドビアスは自嘲気味に笑みを浮かべる。わたしは心の狭い男だと。

「コーラル、久しぶりだな。子どもを貰い受けに来た」

王の執務室にじかに開けられた竜門から出てきたイーヴァルアイに、宰相でもある魔道師長のガリオールが立ち上がって早速子ども

部屋に向かう。

「こちらでございます」

ガリオールが自ら扉を開けて、子供に付いていた乳母や女官を追い出した。次いでイーヴァルアイと王、ラドビアスを部屋に招き入れてぴつたりと扉を閉じる。

これから魔道の側に迎える大事な子どもを選ぶのだ。邪魔が入るわけにはいかない。

近寄って見た子どもの姿にイーヴァルアイは息を飲んだ　ヴァイロン？

月の光を溶かしたようなシルバーブロンドの髪、アーモンド形の深い海を思わせる藍色の瞳。

わたしはこの子に会うために生き永らえてきたのだろうか。差し出したイーヴァルアイの手を恥ずかしがる様子も無く、ぎゅっと握った左側の子どもを壊れ物のようにそっと抱き上げる。

「会いたかったよ、クロード……ヴァイロン・クロード・ヴァン・レイモンドール」

止まっていた時が　動き出した。

了

## 別れと出会い（後書き）

これまで見てくださってありがとうございます。

本編の続きは「レイモンドール綺譚（転成の章）」です。

良かったら引き続きご覧ください。

クロードのその後を外伝として書きたいな・・・とか思っております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9920c/>

---

レイモンドール綺譚外伝（創成の章）

2010年10月8日14時01分発行